

JAFCOF

リサーチ・ペーパー vol.1

韓国江原道および台湾北部の炭鉱関連施設

——巡検記録（2015-16）——

編集：

中澤 秀雄 中央大学法学部

木村 至聖 甲南女子大学人間科学部

2017 年 10 月 20 日



はじめに

JAFCOF（産炭地研究会: URL は本冊子巻末に記載）では、内部に作られた研究班ごとに何種類かのリサーチペーパーを発行している。本冊子は、JAFCOF 全体として発行するリサーチペーパーとしては初めてのものである。

JAFCOF は 2008 年から一期 5 年の科学研究費（基盤研究 A）を継続して受けており、2 期目の研究課題名は「東アジア産炭地の再定義」である。日本の主要 7 炭田（釧路・石狩・常磐・山口・筑豊・三池・高島）に加えて、韓国江原道および台湾北部炭田を対象に加えることで、「(半) 圧縮された近代化」を成し遂げた東アジアの工業化の様相を振り返り、世界的な視野に位置づけようとする研究プロジェクトである。

そこで資金的に苦労しながらも、韓国・台湾の各炭田との人間関係を構築しつつあるところである。本リサーチペーパーでは、第一歩として巡検記録を残し、今後の研究発展の礎にするとともに、ひろく関係者の便に供することにしたい。

このうち韓国江原道訪問は 2015 年夏に実施され、JAFCOF から中澤と島西智輝（東洋大学・経済史）、そして田川市教育委員会の福本寛学芸員が参加した。その資金源となったのは（公財）旭硝子財団助成金である。

いっぽう、台湾北部炭田訪問は JAFCOF メンバーである木村至聖・森久聡・西牟田真希が参加した。その財源は上記した科学研究費（基盤研究 A）である。以下の記録が、これから韓国・台湾の炭田に訪問しようとする方にとっても参考になることを願っている。

2017 年 10 月 2 日

産炭地研究会 代表 中澤秀雄

## 目次

第一部	韓国江原道訪問記録（中澤秀雄） .....	4
第二部	台湾北部炭田訪問記録（木村至聖） .....	31

## 第一部 韓国江原道訪問記録



江原道は韓国最大の産炭地である。日本統治期には北朝鮮側に偏っていた炭鉱開発であるが、北朝鮮と 38 度線で分断された 1945 年以降、韓国政府は希少な国内エネルギーを確保するため東北沿岸部の江原道の開発を進めた。日本統治期に三陟炭鉱株式会社が運営していた長省炭鉱はその一つであり、我々が訪問した 2015 年 7 月にも稼働していたが、2019 年に廃坑とし、韓国石炭公社も解散する政府方針が既に発表されている。

JAFCOF と韓国江原道との関わりは、2013 年 5 月に遡る。韓国地域社会学会において炭田間比較の可能性に関する招待講演を行ったことにより、具体的なカウンターパートとして江原国立大学（江原道春川市）の金源東（Kim Wong-Dong）教授および翰林大学（同）の朴濬植（Park Joon-Shik）教授（韓国地域社会学会会長）を得た。同年 8 月に両教授から、韓国鉱害管理公団に提出する日韓炭田共同研究をテーマとした研究助成申請に加わってほしい旨の依頼があった。この研究資金は採択され、翌 2014 年 2 月に、韓国側が大牟田・田川を訪問した。さらに前述のように中澤が申請した旭硝子助成金が「東アジア Industrial Heritage Route の定礎」というタイトルで採択されたことにより、2015 年江原道訪問が実現した。日本側からの訪問者は、中澤秀雄・島西智輝・福本寛の 3 名である。現地訪問先と訪問計画のコーディネートを元基俊（Won Gi-Joon）牧師にお願いした。元基俊氏は韓国江原道の炭鉱地帯が雪崩閉山したあと、韓国政府が「廃坑地域振興特別法」を制定する契機となった住民運動を主導した人物であり、関係者との人間関係資本を保有している。

江原道訪問の行程は次の通りである。

■7 月 23 日（木） 羽田・福岡空港→ソウル仁川空港、高速バスにて江原道春川（ChunCheong）へ。春川バスターミナルで朴濬植先生及び通訳の出迎えを受け、ホテル内の食堂にて、夕食を取りつつ研究計画等について朴先生と打ち合わせ。

■7 月 24 日（金） 朴濬植先生の車に同乗して春川から舎北（Sabuk）に向け出発。舎北では江原ランド社会貢献部長 Kim ChangWan 氏からの説明を受ける。さらに近くの商店街でランチをとりながら、コーディネーターの元基俊氏へもインタビューを行う。さらに Won 氏が設立した Academy において事務局長 Kim JinYong 氏へのインタビュー。太白へ移動。16 時には Korea Coal Corporation（韓国石炭公社）の長省（JangSeong）炭鉱に着き、An SangJeong 炭鉱長（総務）を表敬、その後、炭鉱の概略について会議室において説明。18 時には Ha Il-ho 氏、Yu Tae-ho 氏と夕食を囲み懇談。太白泊。

■7 月 25 日（土） 朝、Cheoram Coal History Village（鉄炭炭鉱歴史村）を訪問、Won 氏からの説明。11 時には Samtan Art Mine（三炭アートマイン）において CEO の Kim Min-Suk 氏から説明、Art Mine 内で昼食。午後は炭鉱文化祭が行われている旧東原炭鉱（High1 舎北炭鉱文化公園）を訪問、元炭鉱マンからガイドを受ける。夕刻、ソウル行きのバスに乗る。ソウル泊。

■7 月 26 日（日） ソウルから日本に帰着。

以下、各訪問先の概要を示すとともに、インタビューが行われた場合、そのやりとりを記

述する。以下のような詳細な記述が可能になったのは、訪問時に録音した音源を金善美氏（同志社大学）に文字起こし・翻訳いただいたおかげである。記して感謝する。

#### 1 7月24日昼 「江原ランド」訪問

「カジノロード」と呼ばれる国道38号線を通り、3時間かけて舎北に着いた。元基俊氏と待ち合わせていたが、彼が乗った路線バスが遅れているということで、まずは江原ランド社会貢献部ビルに向かった。部長のキム氏は5階の彼のオフィスにおいて、温和な表情で我々を迎えてくれ、訪問趣旨を簡単に聞いたあと、地下に案内してくれた。地下のセミナールームにおいて、ppt資料をもとに江原ランドの概要を説明してもらい、質疑応答を行った。

質疑応答が30分を過ぎたあたりで元基俊氏が地下室に入ってきて、「あとは昼食のときに」と金氏が言い、我々は近くの商店街のカルビ屋に案内された。実際にはこのランチは韓国側3人が旧交を温めあい情報交換する場で、われわれが質問する隙はなかった。13時を回ると、「次はお茶を飲みながら」ということになり、時ならぬ豪雨のなかモール内のカフェに向かった。しかし、キム氏はここで仕事に戻ってしまい、このカフェでのインタビューは元基俊氏に対するものになった。なおランチもカフェもキム氏が全員分払ってくれていた。「個々人別々に払う」とか「割り勘」とかいうことをしないのが韓国流のようだ。

■以下、Kim氏からのppt資料に基づく説明である。

「写真をお見せしながら進めたいと思います。これは1960年代のこの地域の写真で、焼き畑をやっている村の姿です。1970年代には炭鉱が開発されました。当時の鉱夫たちの姿です。おそらく日本の炭鉱ととても似ている風景かと思います。炭鉱の中で鉱夫たちが食事をする姿です。次は坑木を運ぶ姿。ここでは日本語がよく使われています。『先山』『成り行き』とか。

これは1980年代に鉱夫たちが住んでいた社宅です。この写真はまさにここにあった村の写真です。1980年当時の市街地の姿。この写真の場所には現在、江原ランドの従業員たちの寮が建てられています。この空地は現在の江原ランドのある場所です。1990年には政府が廃坑政策に着手し、炭鉱村は徐々に没落します。当時、炭鉱は350か所ありましたが、現在は4か所まで減りました。鉱夫の数も68000人いたのが、現在は2500人しか残っていません。それにつられて地域経済は崩壊し、炭鉱村では1994年から核廃棄物処理場でも歓迎するという闘争が始まりました。これらの写真は住民たちが闘争していた時の写真です。大規模の決起大会とかですね。当時は、数枚の写真では伝えきれないほどたくさんのお出来事が起きていました。

1995年には政府との合意がありました。これは1995年3月3日行われた、政府との合意内容です。合意は5つの内容から構成されていますが、そのうち2つの案、すなわち「閉鉱地域の開発のための特別法を推進する」という政府の約束に基づいて、現在の内国人カジノである江原ランドが設立されました。当時の合意文はご覧の通り塔（碑）になって、子供た

ちの為の教育の場として使われています。

この特別法に基づいて 2000 年度にスモール・カジノがオープンしました。現在、このスモール・カジノはゴルフ場として使われています。また、2006 年には High1 スキー場がオープンしました。このスキー場のオープン後、地域経済に対する波及効果はかなり大きいものとなりました。なぜなら、カジノの時は少数のカジノのお客さんたちだけが地域を訪れていましたが、スキー場のオープン後、家族単位の観光客が地域を訪れるようになったからです。江原ランドの設立と同時に直営と協力会社を合わせて 5200 人の従業員を雇用することになりました。従業員の中ではこの辺の閉鉱地域の住民が 65%を占めました。ここで「閉鉱地域」というのは、法律によって江原道の旌善 (Jeongseon) 郡、寧越 (Yeongwol) 郡、太白 (Taebaek) 市、三陟 (Samcheok) 市の 4 か所と定められています。

先ほどご覧になった炭鉱の姿です。ここが現在はこのように変わりました。現在、このカジノのある建物です。そして 2013 年 6 月にはご覧のようにカジノが拡張されました。江原ランドの設立後、年間 1 兆 3000 億ウォンの売上があり、また、5300 人が働く大きい会社になりました。急速な成長を遂げてきたわけですが、しかし一方では暗い部分も存在します。ここでは重要な事項だけまとめて申し上げます。江原ランドの設立後、その副作用もたくさん現れてきました。これらの副作用を最小化するために、いくつかの制度的装置があります。

いくつかの例を説明します。江原ランドのカジノは外国のように年中出入りできるわけではなく、1 カ月に 15 日しか入場できません。そしてこの辺の廃鉱地域の住民は 1 カ月に 1 回だけ入場できます。1 カ月に 15 日入場できますが、2 か月連続で 15 日間出入りするとその人は「危ない」と判断され、相談を受けないと入場が許されません。そして博打問題を抱えていると思われる人の場合には、本人、もしくはその家族が入場制限を申し込むことが可能です。このように、副作用を最小限に留まらせるための装置が運営されています。この資料をよくご覧ください。江原ランドのカジノを訪れる客数は年間 300 万人くらいです。ただし、この 300 万人は年間の人数で、たとえば私が 10 回出入りすると、そのまま 10 人として数えられるシステムです。実際、重要なのはカジノの純粋な訪問人数、すなわち一度でもカジノに訪れたことがある客の数が重要です。2013 年のデータを見ると、江原ランドを訪れた訪問者数は 64 万人くらいです。しかし、その中身は一年に 10 回も来ないような、2 か月に 1 回ぐらいのペースで訪問するような客が 98%程度です。実際に問題となる人というのは、2400 人くらいです。こうした全体の流れを見ると、一回性・社交型の顧客がどんどん増加し、問題のある顧客の数は徐々に減少する傾向にあることが分かります。このようにカジノの副作用が減るという肯定的な面もありますが、その反面、地域経済の側面からすると、このような数の減少は地域経済に悪い影響を与えます。なぜなら、2008 年に 3700 人程度、4000 人近くいた顧客の数は徐々に減少していますが、地域商店の主な利用者はこのような顧客層なので、地位経済の状況はどんどん難しくなってきたと言われています。

ここからは弊社の社会貢献活動について簡単に説明します。現在、江原ランドはカジノ、コンドミニウム、ホテル、ゴルフ場、スキー場といった多様なリゾートを形成しています。

江原ランドがこれまで国に払ってきた税金は約 5 兆ウォンです。2014 年、つまり去年のデータを見ると、中央政府に約 3800 億ウォン、地方政府に 1600 億ウォン、合わせて約 5500 億ウォンの税金を払いました。ご覧のように、中央政府に払った税金の方がはるかに多いので、地域の住民たちはこのことについて不満を持っています。現在、江原ランドの従業者数は 5300 人くらいです。直接、江原ランドで働いている人は 3600 人です。そのうち、江原道出身の人が 65%程度です。そして協力会社に勤務する従業員はほとんどがこの辺の閉鉱地域の出身者です。国に払っている税金と雇用を除いて、社会的責任を果たすための江原ランドの社会貢献費は年間で約 550 億ウォンです。とりわけ、私たちの部署で運用している社会貢献費は年間で約 230 億ウォンです。230 億のうち、教育環境の改善に約 31%、地域財活用、すなわちまちづくり事業に 17%、福祉財団への支援に 60 億ウォン、26%くらいを使っています。このぐらゐの資金規模ですと、韓国の中小企業の中では 15 位圏には入ると思います。

それにも関わらず、私たちが持っている問題意識があります。というのは、これだけ莫大なお金が出資されたのに、はたして地域社会はどのぐらゐ変わったのだろうか、という悩みがあります。江原ランドは急速に成長したものの、地域社会はあまり変わっていません。ご覧になったかも知れませんが、地域の市街地には質屋だらけ、ラブホテルだらけです。スキーシーズンになると道路はめちゃくちゃになります。厳しい状況にいる人々はますます奥地に追い出され、相対的な剥奪感の問題も見られます。

こうした現実を克服するために、地域の住民たちも様々な努力をしてきました。この方をもしご存じかもしれませんが、これからいらっしゃる元基俊牧師です。2007 年に日本の大牟田に行った時に写真です。湯布院にも行きました。私たち地域住民が求めているのは、村の競争力を育て上げることです。現在、この地域にはたくさんの産業遺産があります。この写真は東原（Dongwon）炭座という閉鉱された炭鉱ですが、ちょうど今夜、石炭文化祭が始まります。でも、雨が降ってきてみんな心配しています。ここは古汗（Gohan）にある石炭産業遺産です。地域の住民たちはこのような場所を活用して野花祭りを行ったり、こういう壁画を描いたりしています。閉鎖された坑道を活用した展示もやります。過去の鉱夫たちがつけていた名札を使ったパブリックアート、公共デザインと言うんですかね？そういう美術作品も作られています。これは鉱夫たちの肺をとった X 線の写真です。閉鉱地域の住民たちが望んでいる町の姿として、ここではよく湯布院があげられます。歩きたい町、ストーリーのある町、人を配慮する町。そうした町を作りたいというのが、住民たちの夢です。

地域住民たちとともに行う私たち江原ランドの社会貢献事業はたくさんあります。先ほど申し上げました通り、私たちは地域住民と考えを共有していて、とりわけ都市再生に高い関心を持っています。そして江原ランドを訪れる年間 500 万人の顧客とこの地域をつなげていくことに高い関心を持っています。そのために、「運炭高道」という昔の鉱夫たちが通っていた道も開発していますし、山岳乗馬も開発しています。また、先ほどご覧になった、産業遺産を活用した炭鉱文化観光村も作っています。しかし、これらの事業には限界があり



ます。専門性に欠けるのが問題です。したがって、外部専門家、とりわけ文化芸術文化の外部専門家を活用することに焦点を合わせています。そうやって文化コンテンツの力で地域社会を変えていくための様々な努力をしています。最後ですが、私たちは地域文化の価値を大切にする企業として認められたいという考えを持っております。

去年、日本からたくさんの方が訪れました。主に安倍政権になった後、カジノ誘致を念頭に置いて訪問した方々でした。北海道、横浜など、13カ所から訪問されました。日本の衆議院の方々もいました。衆議院の方々に私たちが申し上げた内容の核心は、射幸事業というのは、いくらよく準備をするとしてもその副作用、すなわち経済的な没落や自殺、地域共同体の崩壊といった根本的な問題を解決するのは難しいので、地域再生の戦略としてカジノを誘致することにはとても慎重であるべき、というのが私たちの経験からなる判断です。江原道の廃坑地域の住民たちにとってカジノは劇薬の処方、最後の選択であったことを、最後にぜひお伝えしたいです。以上です。

■次に質疑応答に移った。

——元基俊さんと一緒に湯布院・大牟田に行き、新しい地域再生の方法を模索しているという話は興味深く伺いました。こういう新しい方法、新しい戦略は地元住民に受け入れられつつあるのでしょうか。地元住民の反応はいかがでしょうか。

湯布院に行ってきた経験は、実際には私たち江原ランドが主導したのではなく、住民自らの努力の一環でした。地域住民自らが教育をし、先進事例を見学し、新しい商品を作り出すような努力は今も続いています。

——スモールビジネスを住民自身が作っていく、そのことによって地域経済を回していくということだと理解しました。私の理解ではこの江原ランドができた1990年代後半にも、地元住民がスモールビジネスを作ろうとしたんだと思うんですけども、それは必ずしもうまくいかなかった。ですから、2015年の今と1990年代後半の違いはどこにあると思われますか。

それは否定的な変化の意味合いが大きいかと思います。なぜなら、江原ランドに対する依存度は以前よりはるかに高くなりました。それはよくない現象です。実際、10年前にはこの地域は炭鉱によって経済活動が行われていましたが、今は江原ランドによって経済活動が行われるという、とても単純な経済構造になっているので、こうした問題が現れていると思います。現在の課題は、江原ランドを訪れる年間500万人の顧客、カジノの顧客だけではないスキー場やゴルフ場、リゾートの顧客たちを地域に降りてくるようにさせることが、江原ランドと地域社会の宿題でもあります。しかしながら、地域には人々が興味を持って訪れるような観光商品などが足りないのが、江原ランドの顧客たちはなかなか地域社会に降りて来なかったり、降りてくるような魅力を感じないのも事実です。したがって、現在の地域社会が江原ランドの効果を体で感じることに限界がある、と言えます。

——観光の資源、観光の商品という観点から言うと、大牟田でも田川でもそれから台湾でも

かつての炭鉱の歴史が人々を引きつける観光資源になっている側面がありますが、お話を聞いていると、韓国では必ずしも炭鉱の文化・歴史・コミュニティというものが観光資源たりえていないように聞こえます。それはやはり炭鉱の歴史が韓国にとって短く、また否定的な経験、ネガティブな経験だったからでしょうか。炭鉱というものが持つ韓国にとってのイメージはどんなものなのでしょうか。

江原道の炭鉱地域に対する韓国国民の哀歓や愛情はとても大きいです。なぜなら、我が国の発展の原動力は炭鉱村から始まったという点に国民たちが同感しているからです。そうした国民の共感があったからこそ、炭鉱地域にカジノを許可するという特別な対策が可能になったのです。

——カジノだけじゃなくて、むしろスキー場、カジノ以外の観光施設でこのリゾートを経営するとしたら、それはやっぱり経営が難しいんでしょうか。

カジノを除くすべての施設は赤字です。もし経営上の収益だけを考えるなら、カジノだけを運営した方がいいです。しかし、政府がカジノを許可し、その運営を公共機関に任せたのは、廃坑地域の経済再生という目的があったからです。

——先ほど税金を国とか江原道に相当額払ってると聞きましたけど、例えば石炭文化祭など住民のイベントに対して江原道からの補助金等はあるのでしょうか。

産業遺産に関連したイベントがある度に、弊社では5000万ウォンから1億ウォンぐらい支援をしています。江原道などの地方政府からの支援は、イベントそのものに対する支援はほとんどありません。江原道の地方政府はイベントを支援することはありませんが、産業遺産に対する施設投資は主にしてしています。たとえば、これから行かれるかもしれませんが、Samtan Art Mineは江原ランドが江原道に払った税金を投資して作った施設です。

■カフェに場所を移しての元基俊氏とのやりとりは以下の通りである。

——1995年の特別法制定に向けた運動の中でターニングポイントと言うか、政府がここで動くことになったと思われたポイント、ここで政府が変わったと思われるポイントはどこだったんでしょうか。

政府が廃業させたわけではありませんが、炭鉱は政府が考えていた以上に早く廃業しました。そして政府がほとんど考慮しなかった地域の問題が爆発的に出てきたわけです。失業者問題、地域の荒廃化、地域空洞化。これらの問題に対する対策を、政府は持っていませんでした。それで少しずつ予算を投入してあれこれやってはみたものの、すべてうまく行きませんでした。そういう状況において、私たちが提案した特別法というものがぴったりだったんです。この地域をこのままほっといたらダメで、システム、法的な体系を持って制度的・財政的支援をしていくことが正解だと政府も同義したわけです。政府は積極的に同意してくれました。政府はいいアイデアをもらったし、そういう大義名分を私たちが与えたことになります。

——住民のアイデアの中にはカジノは最初から含まれていたんですか。

カジノは政府のアイデアです。私たちはスキー場、ゴルフ場などを考えていました。政府はコロラド州の事例を参考にしました。コロラド州ではデンバー周辺の炭鉱村たちの空洞化で税収が減少し、地域社会が衰退する問題に対応するために州政府がカジノ導入を主張し、住民投票によって3回も否決になりましたが、州政府の強い押し立てによって結局、実現しました。韓国政府はそのモデルを私たちに提案したんです。コロラドでは住民の反発や懸念は大きかったですが、とても切迫な状況だったので、結局は「何でもいいからやってみよう」と受け入れたわけです。

——カジノの副作用については当時考えていらっしゃいましたか。

ええ。映画をよく見るので、カジノというと犯罪、売春、資金洗浄といったネガティブなイメージを持ってきました。だから怖かったんです。でも地域が死んでいくのにあれこれ選んでいる場合ではない、とりあえずやってみよう、ということになりました。

——その時住民が持ってたリゾートのアイデアの中には、カジノ以外のスモールビジネスのアイデアもたくさんあったと思うんですけれども、それはうまくいきましたか。

アイデアはたくさんありましたが、それを実際にビジネスにつなげるには基盤が弱すぎてうまく行きませんでした。また、当時は IMF 経済危機がちょうど重なったので、唯一残ったビジネスがカジノとなったんです。だから余計に人々がカジノに依存するようになったのもあります。計画上では 80 種類のビジネスが想定されていました。

——もし IMF 危機がなければ、この町は別の形になってたんでしょうか。

そうだったかもしれません。なぜなら IMF 以前にビジネス計画が立てられていたし、投資者たちも投資を準備していたのに、IMF が原因ですべて取り消しや撤収になったわけですから。その後の状況は、変数はあったと思います。

——そしてカジノができることになったわけですが、当初から Jeongsun 郡に作るというふうに決まっていたわけではないですね。

アイデアは太白 (Taebeak) から出てきました。当時はカジノではありませんでしたが、特別法制定運動が始まったのは太白でしたし、それをデモンストレーションにしたのは先ほど来ていた Kim Changwan 室長がデモを組織化してここ舎北 (Sabuk) でデモをしました。そして政府はそのデモの世論の圧迫を受けて、やってくれるという約束をしたわけです。決定的には政府はここ舎北・古汗 (Gohan) 地域の住民たちによるデモをととても強く意識しました。だから特別法によって作られたカジノの位置選定においても、ここが優先的に考慮されました。そしてもう一つ重要なことは、この地域は太白より経済的に難しい状況にあったんです。なので、もっとも難しい状況にある地域にカジノを設ける、というのがいい名分にもなりました。

——しかし、その運動が始まったのは太白なのに Jeongsun 郡にできたわけですから、太白の人は不満を持ったのではないですか。

はい、太白地域のリーダーたちはそれについてとても不満を持っていました。しかし、それは私たちの選択ではなく政府の選択です。それは力の問題で、そのパワーゲームで太白は

負けたわけです。だからそのことで私はいろいろなところから攻撃されました。「お前が売りつけた」とか、「なんで太白ではなく Jeongsun の味方になるんだ」という。そういう誤解ゆえに、私はたくさんの攻撃を受けてきました。

——もし韓国の地方自治体が、市や郡がもっと力を持っていたら、違う選択肢があったでしょう。

法制度の過程においては、地方自治体はほとんど力を持てませんでした。住民たちがすべてを主導して、政府と話し合いをしてサインをしました。太白や Jeongsun 郡はほとんど何の影響も持てませんでした。公務員たちが政府を相手に戦うというのは、考えられないことでした。

——何か政治家が果たした役割はありましたか。

政治家たちはカジノが決定された後に、不満を言うことで大声を出しました。ことが進んでいた過程では参加できなかったし、住民がすべてやっていたので、政治家が介入する余地はなかったんです。彼らはカジノが決定されてから不満と言っていたし、その後の選挙の時には自分が何か大きな貢献を、仕事をしたという風に嘘をついていました。「自分がカジノ決定の一等功臣です」とか。政治家たちは選挙の時だけそういうことを言いますが、私たちからすると詐欺師のようなものです。

——先ほど江原ランドの建物の中でスライドを見せてもらいました。その中に元さんが日本の湯布院や大牟田を視察している写真がありました。この取り組みを始めたのはなぜですか。

カジノができて相当時間が経って、住民たちは気づくようになりました。江原ランドがすべてを解決してくれるわけではない、ということですね。ここ舎北・古汗の地域住民たちがです。それで始めたのが「私たちの町を私たちの力でどう発展させるか」を勉強するアカデミーでした。私はそのアカデミーの企画を立ててあげて、講師としても活動しました。また、当時、私は「希望製作所 (The Hope Institute)」とも関係があったので、そことのつながりで住民リーダーが日本の事例を見学する取り組みを考えました。住民たちが江原ランドばかり見ているのではなくて、自ら新しい代案を考え、悩むという取り組みを。後で私たちが会う予定の団体がそのアカデミーを主導した団体です。そして私たちが会う人がその実務担当者で、いろいろ説明してくれると思います。その団体はデモの際の中心でしたし、江原ランドにもっとも強く圧力をかける圧力団体でもあります。そしてまちづくりアカデミーを引っ張っていく団体でもあります。私はそれを助ける役割をしてきました。

——この新しい方向性・戦略・方法論は住民に理解されてると思いますか。

とにかくこれは長い時間が必要な取り組みです。江原ランドに依存しない地域の独自の自生力を作っていくには、相当な時間が必要だと思います。今、石炭文化祭とか咸白山の野花祭りなどの祭りがありますし、あるいは住民自らが協同組合を作ったり社会的企業を作ったりする試みもありますが、これらが総合的に作用して新しい代案、自生力を育て上げていく過程の途中にいると思います。まだまだ初歩的な段階ですが。

——今晚と明日行われる炭鉱文化祭というのもこういう新しい試みの 1 つの例なんですか。

その動きはアカデミー以前から少しずつ始まっていました。石炭文化祭はその以前からやってきたわけですが、そういった取り組みを通じてまちづくりの意味合いや方向性のようものが明確になったと思います。住民が自ら企画してアイデアを出して参加して作られる祭りというのは、韓国社会ではとても珍しい事例です。ほとんどは行政が予算を使って、外部の専門家がやってきて代わりにやってくれるような祭りが多いです。でもここでは最初から住民が主体的に祭りを作り上げてきた点に意味があります。

——政治の役割で質問があるんですけど、『特別法』っていうのは永久にある法律なのか、それともある期間で終わってしまう法律なのか。

特別法は法的には時限法なので特別法という言い方になります。私たちが自生力を持つのが難しいので、一定期間の間、一定地域に限って特惠をくれるというのが特別法です。だから時効が来たらなくなる法です。でも幸いなことに、2 度延長されました。なので、この法の時効は 2025 年までです。もともとこの法は一時的な適用を想定したもので、その間に私たちは自らの力で立ち上がる、ということを約束したことになります。ですからその期間が延長されたというのは、それがちゃんとできていない、という意味でもあります。

——日本の産炭地域振興特別法は 10 年間のはずが 40 年ぐらい続いたので、もしかしたら韓国でもそのぐらい続くかもしれない、と思います。

はい。韓国の法律の相当部分は日本と似ています。韓国で石炭がなくなったのも日本の石炭産業合理化の法律、政策をそのまま真似したわけですし、法律体系は似ていると思います。私たちは最初に 10 年を想定して始まってますから。

——今、ウォンさんがやられている活動に、学生が参加することはあるんですか。

1995 年当時、住民デモがあった時は、すべての住民が参加していました。学生たちは学校も行きませんでした。登校拒否ですね。商人たちは店を閉じてデモしに出てきたりして、当時は。

——今の炭鉱文化祭にも大学生・高校生は協力していますか。

実務は住民たちがやっていて、プログラム自体は一般住民みんなが参加しているので、学生を別に区別して何かしているわけではありませんが、家族単位の参加はよくあります。全体をリードするのは住民リーダーです。バンドの公演などは青年たちや学生たちが準備したりします。

## ■訪問しての感想

朴先生によれば、社会貢献部というのは江原ランドがあげる収益を地域に分配する役割を担っており、陳情者が列をなす場所だということだった。その一方、部長の Kim Changwan 氏はソフトな物腰で、Won 氏とも一緒に運動をした仲らしく二人で盛り上がっていた。現在の組織上の役割とミスマッチを起こしているような感もあった。カジノなしでは収益を

あげられない点、ギャンブル依存症への対策を語りながらも依存症者のほうがお金を落としてくれるという点など、カジノに依存せざるを得ない現状を率直に語ってもらえた。とはいえ、建物近隣の環境を見る限り、カジノの収益が地域経済に還元されていないことも確かであった。



Kim Changwan 氏による説明



Won GiJoon 氏インタビュー

## 2 7月24日午後、旌善郡 Academy 訪問

江原ランドから少し移動し、東原炭座の入口へ。そこには、特別法制定を目指すデモの出発点となったトンネルがあり、坑夫の働く様子などが彫り込まれたレリーフがある。そのトンネルをくぐり、東原炭座のある広場を抜けた、ちょっと分かりにくい場所に Academy はあった。

元氏は慣れた様子で中に入り、事務局の人と挨拶を交わしたのち、応接室に我々を案内してくれた。事務局長の Kim Jinyong 氏が対応してくれた。次の予定もあり、翻訳に必要な時間もあったので、あまり突っ込んだやりとりが出来なかったのが残念である。ここでは大量の資料を頂いた。すべてハングルで書かれていたが、坑夫の聞き取り記録などもあり、まさに炭鉱の記憶再生に取り組んでいる拠点と言えよう。

——アカデミーの歴史を簡単に説明していただいてもいいですか。どのようにアカデミーが設立されて今何をやってるのかということ。

江原ランドは廃鉱地域特別法によって運営されていて、特別法は10年単位で改正を繰り返しています。したがって今後、改正されない可能性もある。江原ランドは95%が内国人カジノに依存していて、地域は江原ランドに絶対的に依存しています。内国人カジノを法的に許可してくれている特別法が延長されなかったり、何かしらの法的な問題が生じたりする場合、また、他の地域に似たような施設ができる場合は、私たちはかなり危ない状況になります。このような危機意識が2007年半ばから公論化されて、共感が形成されることによっ

て、江原ランドに依存することなく、危機的状況がやってきた時にそれを乗り越えることができる自生力を持つべきだ、そのためには人がまず変わるべきだ、という趣旨からアカデミーを始めました。アカデミーは今年で9年目です。初期はとても高い情熱と関心を持っていましたが、時間が経つとともに、人々の関心と参加の度合いは低くなりました。それとともに、「私たちはいろいろ勉強してはいるけど、結局、地域では何が変わったのか」という問題意識が高くなりました。アカデミーの趣旨そのものは地域や江原ランドの競争力・自生力を育て上げるところにありましたが、現実ではそううまくは行かなかった。したがってアカデミーはかなり萎縮していた状態でした。アカデミーは人々が考えを変え、学ぶ場所であって、目に見える町の変化などを引き出すのは難しいところがあります。私たちはそういう見方ではなく、地域発展のための理論的土台を作る場として見なされたいと思っていて、これからもこの事業を続けていくつもりです。

——このアカデミーは、資金的には江原ランドからお金が出ているんですか。

現在は旌善（Jeongseon）郡の地方自治体と江原ランドが共同で後援しています。当初は住民による支援で始めました。アカデミーの評価が良かったので、江原ランドが積極的に後援するようになりました。それは自治体も同じです。事業成果がいいと、あちこちでお金をくれるというところが多くなりますから。江原ランドは太白（Taebaek）市や寧越（Yeongwol）郡、三陟（Samcheok）市など、地域社会の状況が悪化してきた周辺の閉鉱地域まで事業領域を拡張するようになりました。もちろん、実際の業務はそれぞれの地域の社会団体などが行います。

——先ほど、「2007年ごろにこのままではダメだ、変わらなきゃいけないという意識が高まった」とおっしゃっていました。2007年に何が起きたかをもう少し詳しく教えていただいてもいいですか。

2005年に、1995年に制定された特別法が延長されました。今年が2015年ですが、当時は10年後の2015年に特別法が延長されるかどうか分からないし、未来を備える必要があるという緊張感が高まっていて、そういう趣旨からアカデミーが始まったんです。そうした意味で、2005年特別法延長は一つのきっかけとなりました。

——1995年の運動は、誰に対して何を求めるような運動だったのでしょうか。

政府の閉鉱政策によって、この地域は急速に没落しました。政府の政策は閉鉱地域に対して何の対策やビジョンを持たないまま、一方的に閉鉱させるというものだったので、政府に抗議する意味でもデモをしました。その結果、特別法など、江原ランド設立の基盤を作り出すことになりました。結果的に、その時のデモはこの地域の持続可能な発展を可能にした歴史的背景となったと今は思います。

——視察する場所として湯布院や大牟田を選んだのはなぜですか。

2007年にそこに行きましたが、実は大牟田と荒尾を見に行っただけではなく、通り道でした（笑い）。当時、私たちは観光都市の方向性を目指すべきだと考えていて、そこにアカデミーの講演者として現在のソウル市長である朴元淳さんが来ました。彼が講演の中で事

例として紹介していたので、「じゃ、直接行って確認してみよう」となって湯布院に行きました。その時の見学プログラムは「希望製作所 (The Hope Institute)」が企画したものでしたが、私たちの地域と似ている炭鉱地域だし、近いから行ってみることにしたんです。

湯布院について簡単に触れておきましょう。実は私たちの地域は大規模の外部資本や企業によって約 20 年間、開発されてきた場所で、4 兆 5000 億ウォンくらいの資金が江原ランドを通じて炭鉱に投資されてきました。地域の変化というのは、外部的には驚くほど変わりました。しかし、今となってみると、外部資本と特定の企業、そしてその特定の企業によるリゾート開発事業は地域とそんなに連携されていない、という教訓を得ているところです。

それに対して湯布院の場合は、外部による大規模な投資資本が入った場所ではなく、約 30 年以上をかけて地域住民による段階的な変化が進み、それに対して地域住民が共感しているので、今後の持続可能性が見られる。地域住民によって町が変わったので、変化の経済的な波及力を含むすべてが地域文化にきちんと溶け込んでいる点がとても羨ましかったです。私たちの地域も、これからは企業主導型の開発ではなく、住民主導型の開発を追求すべきだと考えました。

——そういう動きは今韓国でも『ソーシャルエコノミー』とか『ソーシャル・エンタープライズ』というような言葉で表現される新しい動きとして起きていると思いますけれど、そういう社会的な動きと皆さんの動きというのは連動していると思いますか。

まちづくりやコミュニティビジネスなどはこれまで試したことがあります。それらを学びながら私たちが感じるのは、ベンチマーキングというのはそれをそのまま模倣して私たちの地域に持ってくるのではなく、成功している地域と私たちの住む地域は特性と文化などがそれぞれ異なるので、それがとても素敵に見えたのでそれを学んできてここで似たようなことを試しても、失敗するには理由がありました。とりわけコミュニティビジネスの場合は、それは日本から導入された概念かと思いますが、我が国では農村で主に見られます。農作業の暇な時期に 50 万ウォン、60 万ウォンでも稼ぐことができれば、それは農夫たちに役にも立つしね。

でも、ここはで江原ランドという特殊性ゆえ、仕事がとても多いですし、多くの仕事は 200 万ウォン近い報酬がもらえます。掃除とか、おばさんたちが江原ランドの協力会社で働く場合でもそうです。なので、コミュニティビジネスのような事業をやるにはとても難しい条件です。やる人がいないわけですから。

まちづくりの場合は、それが失敗したのは、私たちは 10 年近くを走ってきたわけですが、その過程において江原ランドに対する依存度が高くなりすぎていました。外部の力によって地域が変化したので、住民たちは政府や江原道に対して要求することに慣れてしまいました。自ら何かをしようとするやる気や欲求の不足、変化に対する不満がとても多かったです。それらが失敗の原因だと思います。そこから、アカデミーの活動を通じてそういう意識を変え続けなければならない、と考えるようになりましたね。

——炭鉱文化祭とか炭鉱映画祭のような様々な取り組みをしている中で、そういうふうに「自



分たちでやるんだ」っていうふうに住民が変わる、そういう実例を感じたことはありますか。

20 年経った今になって、骨身に感じるぐらい反省している部分が実はそれです。私たちの団体は、胎生的なアイデンティティが不明確なんです。特別法を制定させた団体であり、特別法のもっとも重要な核心価値である内国人カジノの運営権、独占権を守ってきた。もし我が国に内国人カジノという独占権がなかったとしたら、あちこちの地域が内国人カジノを許可してほしいと要求する考えすら及ばなかったと思います。タブーとされる事業だったので。でも江原ランドがそれをやっているの、韓国国内ではそれが議論になっています。なので、毎年、他の地域からは内国人カジノを許可してほしいという要求が続いていますし、また、特別法は 10 年毎に延長しなければならないし。私たちはこれまでそれを防衛するだけで大変でした。防衛のためにほとんどのエネルギーを使いました。実は特別法とか江原ランドが必要な根本的な理由は閉鉱地域の再生だったはずなのに、それは防衛してはいるけれども、閉鉱地域は再生されないという結果が出たわけです。

#### ——協働推進委員会が最初に持っていた方向性というのとは...

閉鉱された後、私たちが持っていた地域のビジョンや目標は閉鉱された炭鉱を観光都市に変えることでした。当時、韓国の炭鉱開発は本当に凄まじい勢いで進んだので、それによってこの地域はほとんど廃墟のようになっていました。交通状況も本当に大変で、今のようない便利な道路ではなかったです。他の事業をやるような環境条件ではとてもなかった。内国人カジノという特段の装置、博打中毒という副作用を量産する事業をやるしかなかったし、江原ランドはその事業を通じて財源を作り、自治体が事業に着手できるお金を支援することになりました。私たちは当初の目標であった観光都市化、先ほど申しあげました企業主導型、リゾート団地中心の開発は地域が観光地化する上で役には立ちましたが、さほど大きな意味は持てませんでした。最近、協働推進委員会は外部からの脅威に対する防衛だけではなく、当初の目標を達成するための事業をすべきだと考えています。この地域には毎年 600 万人くらいの観光客が訪れていますが、そのほとんどは江原ランド、High1 リゾートの中だけに留まる人たちなので、地域はただ通り過ぎる場所です。なので、地域を訪れる観光客をどうやって吸収し、観光地化できるかという悩みを持ち、最近では地域観光センターの設立の準備をしています。

次に地域観光センターの話をしてします。地域観光センターというのは単に電話を受け取ったり PR 資料を作ったりする、自治体が行う消極的な意味での役割ではなく、私たちの地域は白頭大幹（白頭山から知異山まで続く韓国最大の山脈）に隣接し、廃鉱地域という歴史性を持っているので、全国的な観光資源や歴史的意味を持つ場所です。特に江原道の南部地域は韓国のどの地域と比べても負けないぐらい豊富な観光資源を持っています。それらをどう商品化するかという、玉はたくさん持っていますが、それらをつなげないと宝物にはなりません（韓国のことわざ）。そういうことが現在、あまり進展してないので。企業主導型、ハードウェア中心の地域開発は地域にとってあまり役に立たなくて、現代の観光パターン

というのはハードウェアで勝負できるものではないです。たとえば南怡島（Namiseom）と比べると、ここでは南怡島の数百倍の投資がなされましたが、南怡島ほどの効果も出てないような状況です。今は地域の文化でも観光でも教育問題でも、お金で解決できるものはほとんどない、と考えるようになりました。地域観光センターではそうした問題について、商品を企画し、また、一日泊まる予定だった人々が二日目、三日目も泊まりたくなるような、High1 リゾートにくるような人々が地域とつながることができる、結果的に High1 リゾートも繁盛して、地域社会にも観光客が吸収されるような、相互 Win-Win できる構造が作られることを期待しています。

——商品化の具体例は何かありますか。

今、設立を準備している段階ですが、そういう事業構想を持っています。そして地方自治体と江原ランドが相互協力する体制を目指している状況です。実例としては、まだ達成したことはありません。それに向けて準備をしているところです。これは昨日、江原ランドのコンドミニアムの部屋毎におかれた冊子ですが、江原道の飲食店が載っています。私たちの悩みの核心は、どうやって High1 リゾートと地域をつなげるか、どうやってともに成長していくか、ということです。これまではあまりにも偏った成長をしてきたので、今、協働推進委員会のほとんどの活動はそこに主な関心がおかれていてと考えていただきたいです。

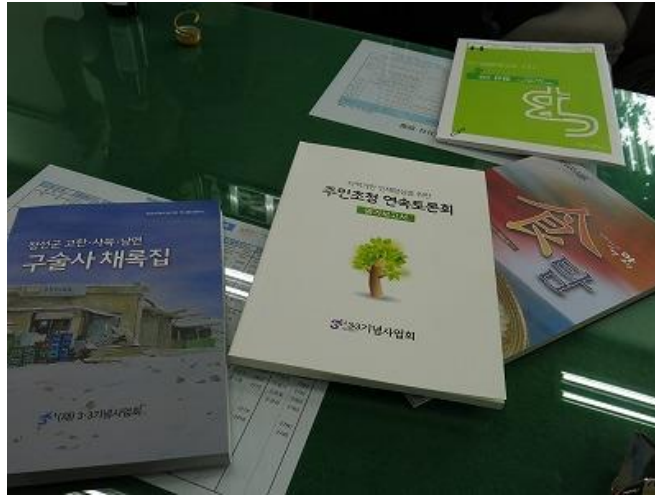
これは一人当たり 20 万ウォンずつ払って、私たちの団体が作ったものです。もともと江原ランドはこれをおくことに反対する立場でした。リゾートの中に入店している飲食店たちと法的に衝突するので。この問題を解決するために、何年もかかりました。

——リゾートとか地域の町づくりとか成功するには、韓国人の休暇の取り方も関係するのでしょうか。

私たちが政府の政策までどうにかできるわけではありませんので、それに合わせて生きていかないとはいけませんね。

■訪問しての感想

2007 年を転換点として地域主導のコミュニティビジネスへと地域活性化の方針が転換していったことが説明された。日本の産炭地（とくに夕張炭田）が 40 年近くかかって、その方向に転換したことを考えると、かなり早期の方針転換といえる。反面、それが実態として動いているには至らず、地域観光センターをはじめビジョン段階にとどまっているようだった。



Academy が刊行した聞き書きや地域資源パンフレットなど

### 3 7月24日夕方、韓国石炭公社長省（JangSeong）炭鉱

16時過ぎに到着すると、先方は待ち構えていたようで訪問を急かされる。よく分からないまま所長（General Manager）に応接室で表敬。ここでは元さん、朴先生が我々の訪問目的について説明してくれた。表敬は10分程度で、その後会議室に移り、担当部長らしき人からpptで炭鉱の概要について説明を受け、若干の質疑応答を行ったが、17時になり打ち切りになったのは残念だった。

#### ■表敬訪問時の所長の話

私は長省（JangSeoun）にずっといました。昔は6000人が働き東洋で一番大きい炭鉱と言われていました。年間の最大生産量は、223万トンまで生産していました。1979年です。太白（Taebek）市もこれからが深刻です。長省では今、地下1160mくらいまで行っています。炭鉱というのは、宿命的に廃業することになっています。資源には限界がありますからね。いくら続けたくても、続けられない。太白以下で5万人が食べて（生活できて）ますが、長省がもし抜けた場合は、地域空洞化をどうするかというのはもっとも大きなジレンマです。長省が閉山した場合は、商圈そのものが成り立たなくなると思います。誰のために商売をして、誰にものを売って生活するのか、ということになりますよ。太白全体が崩壊することもあり得ます。いくら続けたくても続けられないし、人間が資源を求めて下へ、下へ降りて行くのは限界があります。先の話のように、私たちは今、地下1000m以上のところで作業をしていますが、そうやって降りて行くのも限界があります。温度とか風圧とか地熱とか、そういうすべての条件がどんどん悪化して行きますから。長省鉱業所が閉まる前に、太白市が何か対策を立てるべきです。これは深刻な問題です。今は長省鉱業所があるから、市長の公務員を含めて約5万人が食べていけているわけですから。太白市でも公務員が日本の夕

張市に行って、ベンチマーキングしてきたじゃないですか。夕張が減びた話、聞きましたよ。

## ■会議室での ppt による説明

今日は長省鉱業所にお越しいただき、どうもありがとうございます。話すことが多くはないので、私の知っている範囲で今から長省鉱業所について簡単にプレゼンテーションをしたいと思います。長省鉱業所はソウルからは 3 時間半から 4 時間くらいかかります。原州市 (Wonju-si) を通って、太白まで。この会社を左右にして太白山と咸白山があります。高さは太白山が 1567m。ここは漢江の発原地で、洛東江の発原地でもあります。だからこの手前に流れている水が洛東江に、あちらの水は漢江を通してソウルに行きます。気候はとても涼しい方で、高原地域の気候を見せています。

ご覧のように、太白は 1936 年に日本人によって開発に着手されました。1969 年には垂直坑道が完工し、1989 年になると石炭産業の合理化が始まって、急激に人数が減りました。3 交代から 2 交代を経て、今の生産規模は 48 万 5000 トンです。組織構成としては、所長の下に副所長がいて、8 つの部署が 3 つの生産部の生産を直接担当しています。5 つの支援部があります。人数は一般職が 108 人、機能職が 548 人、直営が 656 人、外注領域が 500 人～1156 人くらいで運営されています。

全国的には 13 億 4300 万トンが埋蔵されていますが、可採量は 5550 万トンです。石峯 (Seokbong) が 7300 万トン、長省鉱業所には 6500 万トンが埋蔵されています。今年の実産量である 48 万 5 千トンを基準に計算すると、単純予測としては今後 52 年間、採掘することができます。これは私たちが -600m まで試錐をして確認したことです。ただ、実際にはいろいろな困難が予想されるので、52 年ではなく 10 年～15 年で終わるかも知れません。

これは石炭を採掘する過程です。採炭場所から選炭を出荷、ここからベルトで鐵岩 (Cheoram) まで運んで、そこから全国に行きます。今は発電用ではなく純粋に民需用としてのみ供給しています。

ここがもっとも重要なところです。ご覧のように、これが地下にある堅坑です。7m/s の速度で動きます。これは外のエレベーターの 3 倍ぐらいの速度です。人数としては 179 人が乗って働いています。次が石炭専用です。これは速度が 13.5m/s です。石炭 34 トンを約 900m 運んで、ここから鐵岩駅まで 3169m を運んで出荷することになっています。私たちの現在の主な仕事は -425m、つまり 1025m レベルを降りて行って主な採炭をして、さらにその下の採炭のための作業もしています。そうやって生産された石炭はここまできて、-300m でこの堅坑を経て鐵岩駅まで運ばれます。

次は弊社で主に使っている採炭方法について簡単に説明します。まずは断層の上部・下部を傾斜 38 度のところで半分します。その上で 17m 毎に着弾しておいて、ブロックごとに上部にある炭を回収する方法です。そうやって左右 150m を展開します。その上で 50mm の穿孔を 13m～17m くらいやって、17m 上部にある弾を爆発させて回収します。回収された炭はベルトに乗って降りてきて、鉱車に乗せてこの垂直坑道で運ばれるというシステムにな

っています。

私たちの最大生産量は、1979 年を基準にして 227 万 5 千トン、そこからはずっと石炭産業合理化によって生産量が減って、現在の生産量は 1979 年の 22%程度です。これは災害の推移です。負傷者の数ですね。1979 年度には 238 人の負傷者がありましたが、石炭産業の合理化産業によってどんどん労働者数が減ってくる中で、去年（2014 年）は 4 人くらいの負傷者が出ました。

最大生産量を記録した 1979 年の労働者数は 5226 人でした。今は石炭産業の合理化や 3 交代から 2 交代への変化、週 5 日勤務制の定着によって、労働者数は 656 人まで減っています。これは最盛期であった 1979 年の 13%に当たります。労働者数が減った分、地域に住む人口も減っていると思われます。現在、炭鉱の数は 139 か所くらい。昔は 350 か所程度あったので、それだけの人口がこの都市から流れていったと考えてください。したがって都市は空洞化しています。この辺には私たちの社宅が本当にたくさんありますが、昔は 5000 人近い人々を受容していた社宅に今は 1000 人くらいしか住んでないので、多くの社宅は空き家状態のまま放置されています。なので今、都市はとても荒廃しているように見えます。

#### ■質疑応答

——生産された石炭の納入先、石炭のユーザーは誰ですか。

今、韓国で石炭を使っているような人々は、もっとも庶民層の人たちです。もっとも貧しい層。そして一部はレストラン、肉を焼いて食べる飲食店のようなところでも使われます。主に暖房用ですね。

——発電に使うことはありますか。

発電のために石炭を使うことは今年からなくなりました。それ以前は無煙炭発電所がありました。無煙炭発電所を全部なくして、今は有煙炭や LPG などの発電所が作られています。無煙炭発電所はすべてなくなりましたね。

——掘っている最先端ではどんな機械を使っていますか。ドラムカッターですか。

高速で穴を掘らないといけないので、ロードヘッダーなどを使います。大型坑道になります。中型の坑道は 4.5m～4.9m くらいですが、採炭作業は主に穿孔発破をして、それから小型のフォークレーンを使います。採炭の作業場には、状況によって違いますが、穿孔をして昔のように人力で炭を回収して乗せるようなところがあれば、小型のフォークレーンを使うところもあります。主にこれら 2 つの方法で採炭をします。

——さっき、「週末お休み」というお話でしたが、その間坑道の維持はどうしてるんでしょうか。

昔、木でやっていた時期は、そういう心配をよくしていました。坑道整備をしてからは、半月経ってもあまり痛みませんでした。今はすべてが鉄、アイロンになっているので、1、2 か月放置してもあまり心配はありません。ただ、トンネルがとても深いですから、少しずつではありますが全体的に下がる、収縮するということはあります。でもその程度のことは、

9日ぐらいの休みならあまり問題にはなりません。水は自動ポンプで汲み上げられます。

——最近も新しい従業員を採用していますか？

いいえ。石炭産業合理化以降、政府によって決められた人数があるので、それ以上は採用できません。何か特別な計画とか、欠員がない限り。欠員になった時はすぐ埋められます。昔は事業所も大きかったし、人も多かったし、本当にさまざまな採炭方法を試していました。去年5月16日の日付で、186人がやめました。2年毎にそのぐらいの人数が減っているので、人数は減る一方ですね。その人たちはこの地域で他に仕事がありませんので、出ていくことになります。ですから人の流出は止まりません。政府が今後、維持したい石炭生産量は約100万トンから150万トンらしいですが、私たちはこれ以上、地下に降りていくところがありません。なので、時々「掘りましょう、やりましょう」と言うと、政府はそれをあまり喜ばない。だから「これ以上降りていくことはできない」という風に政府を説得します。せめて炭鉱の寿命を長く維持することで、ここにいる地域の人々と一緒にやっていくことができる。生産量を無理やりそのまま維持しようとすると、10年持つものも5年、3年くらいしか持ちません。なので、私たちは私たちに適切な生産量を維持しながらも、炭鉱を長期的に維持させるという目的を持っています。

——今写真に写ってる機械は、韓国で開発したものなのか、それともどこかの国の技術を輸入したものなのかを知りたいです。

国内ではあまり需要がないので、開発する必要もないですし、作っているところもありません。これはドイツから、あそこの穿孔機はスウェーデンから輸入されたものです。京東鉱業所（民間の会社）のようなところは大きい会社で、輸入すると値段が高かったので、こういう機械が入ってくるとそれをスケッチして、同じようなものを作ってしまう。だから値段は3分の1に抑えることができます。去年も直接ゼンブスケッチをして行きました。「同じものを作る」って。私たちは方法がないから、輸入しますが。国内ではあまり需要がないので、開発しようとするとお金がたくさんかかりますし、輸入するしかないんですね。

10年ぐらい前に、日本製の小型クレーンを使っていました。名前は「白虎」か何かでした。とてもいい機械でしたが、値段が高くて。日本製の機械はいいんですが、ここは水が多いのでトラックが腐食してしまいます。今は小型化、国産化しているので、京東鉱業所ではそれがないと仕事にならないみたいです。京東鉱業所では国産化して機械を作ったので、今はそれを使っています。私たちはフォークレーン式で少しずつやっていますが、京東鉱業所ではそういう日本式の機械を使っています。

## ■訪問しての感想

規模的にも KCM と近いため、生産性向上や災害減少など、類似点があるように思われる。海外技術、とくに日本の技術導入についてはこれまで見てきた文書からはわからなかったもので、非常に有益な情報だった。



長省炭鉱



会議室での説明

#### 4 7月24日の夕食と宿泊

##### ■太白市内の古民家レストランでの夕食

メンバーは、それまでの6人に加えて、次の二人の地元市民運動リーダー。

Ha Il-Ho: Chairman, Taebaek City Council for Social Welfare

Yu Tae Ho: Chairman, Taebaek City Council

この古民家レストランは、近くの山の上にあった民家を元基俊氏らの提案によって移築してきたものということである。内部はなかなか興味深く、日本の民家との共通性がいろいろと見られた。客は我々だけだった。少し休憩したあと、IL氏とYU氏がやってきた。基本的には韓国側同士で話をしていたが、中央政府・地方政府・住民との間の溝の深さ、建設利権など、日本の地方と同様の問題を抱えていることがわかった。したがってこの夕食は、全体として地元住民の奮起を得られず孤立しがちな地元運動リーダーたちが互いを慰め合う会だった。何から何まで中田鉄治体制下の夕張と似ていたが「あなたたちが希望だし、時代はどんどん変わっていますから」と最後にお伝えした。

##### ■宿泊先

19時くらいに食事会は散会となり、近くのパン屋 French Baguette で明日の朝食を確保したのち、車で宿泊場所の O2 Resort Forest Stay に向かう。途中、元基俊さんの自宅に寄り、車2台体制となってから向かったが、山道をどんどん奥まで入るので心細くなった。最終的に辿りついたのは、舗装されていない道の先にバンガローが広がるエリアで、日本各地にあるスポーツ合宿用バンガロー村という風情である。部屋も殺風景で、テレビと布団とキッチンがあるだけ。バスルームについては、トイレと同じ空間に仮設シャワーみたいなのが付いていて、たらいを使って体を洗わねばならなかった（当然、うまくやらないとトイレの便器もびしょ濡れになる）。この Shabby な施設では、観光都市としてやっていくのは大変



だなど感じてしまった。最初に大きな投資をしたあとメンテナンスが出来ない太白市。このあたりも夕張的である。



古民家レストラン

## 5 7月25日朝、鉄岩炭鉱歴史村（Cheoram Coal History Village）訪問

鉄岩駅は太白駅からやや南東に数km下がったところにある。この駅は現役 of 石炭集積所となっており、石炭運搬車両、背後の山の傾斜を利用した貯炭場、そこから車両に石炭を積み込むホッパー等を一望できる。太白市のHPでも石炭遺産として紹介してあったが、今回の旅行の中で構造物としては最も見応えのあった場所である。この一帯は映画「血も涙もなく」の舞台になったとのことで、俳優イラストの等身大パネルが設置してあった。

駅から通りの反対側に、時代が止まったような商店街があり、営業しているかどうかは一見分からなかった。しかし、何とこの商店街の中がすべて石炭博物館となっていた。集客は大丈夫なのだろうかと思わざるを得なかった。

商店街の南側に History Village の碑文があり、そこから順番に店の中に入っていく。一部の施設はクローズだった（Won さんの解説によると、資金不足のため、全部を開館することができない状態にあるらしい）が、商店の中に入ってみると内部はアーティストが好むような流行の造りになっていて、「これでは本当のことは伝わらない」と Won さんは嘆いていた。いずれにせよ、ここを知らない人は単に通り過ぎてしまうだろうと思われ（アスファルト舗装中の商店街前の泥んこ道を全力で通過する車も多数あった）、勿体ない気もした。なお博物館は市が建設し、地元の「芸術文化協会」が運営を受託しているが、先述のように資金不足で思うような運営が出来ていないらしい。

商店街の北側と南側は大規模な土木工事を行っていた。元さんの解説によると、ここにあった民家は古さが足りないということで取り壊し工事を行っているとのこと。元さん自身



はそんな必要はないという見解だった。夕張市を彷彿とさせる公共事業天国ぶりだった。一方、商店街の真正面にある鉄岩駅の貯炭場はいまでも稼働しており、江原道石炭遺産を代表する景観と言えよう。



鉄岩駅貯炭場



鉄岩炭鉱歴史村内部の展示

## 6 7月25日昼、Samtan Art Mine（三陟アートマイン）訪問

太白からさらに車で1時間ほど、戦前には三陟炭鉱株式会社が保有していた三陟炭鉱跡につく。江原ランドでの Kim Changwan 氏からの説明にもあったように、ここは政府補助金により、炭鉱施設を利用したギャラリーとして運営されている。総務の Kim Minsuk 氏から説明をうけたのち、ギャラリーを見学。鉱夫のシャワー室だったところにミロのビーナスのようなものが飾られていたり、炭鉱機械がジュエリーの展示箱になっていたり、というような形で脈絡なく様々な美術品が飾られている。そのうち、客として元文化大臣がやってきたということで、Minsuk 氏は我々をそっちのけにして、パトロンたる元文化大臣に一生懸命説明を始めた。我々は打ち捨てられたといってよい炭鉱設備（ただし2001閉山なので、内部は一通りの施設が生き残っている）を見たのち、レストランで昼食。炭鉱夫弁当というのを食べてみたが、ボリュームだけで味はイマイチだった。

### ■ Kim Minsuk 氏からの説明と質疑応答

ここでは1963年から炭を掘り始めました。1913年に日本人がここに来て、炭脈を発見しました。日本人が炭脈を発見したというのは、炭を持っていくというつもりだったんですが、大した競争力がなかったんです。道路事情とかの関係でさほど採算性がなかったので、地域の人々が少しずつそれを引き抜いて使っていました。1963年に炭を掘り始めて、でも2001年には閉鉱となりました。その後の11年間、炭鉱はそのまま放置されていました。その後、ここの活用案をめぐって入札があつて。ここの土地は曹溪宗、すなわちお寺のものです。そして建物は旌善（Jeongsun）郡など、地域のいろいろな人が所有しています。昔、炭

を掘っていた人が捨てて行ったのです。だから入札ではこの活用案を受け持ってやる人を探していました。予算は 150 億ウォンで、それにプラスして建物と土地、鉦夫たちが使っていた機械がついてくる条件でした。運営の担い手となる人にはこれらをすべて無償で貸し出すことになりました。

私は Kim Minsuk で、美術品のコレクターです。コレクターとしてこれまで 150 か国を回って、約 30000 万点の美術品を持ってここに移住してきました。今日、せっかくここにいらしたので、プレゼントを差し上げます。これは 1913 年からの Memory and Creative、つまり蘇生というキーワードで作り上げたものです。Space and Storytelling をした空間ですね。

こういう空間がヨーロッパには多いです。私は 15 年ぐらい前に、ヨーロッパのデュッセルドルフにあるエッセン地域で働いたことがあります。そこで働きながら、韓国にもこういう場所があるといいな、と思うようになりました。それで私はここで 87 個のコンテンツを開発したわけですが、とりわけ重要に考えたのは建築です。その次がデザイン。その次が、世界的なクリエイティブな人々を招待して、200 人の作家が集まりました。お茶を召し上がりながら、こちらを先にご覧になってください。これは私たちのウェブサイトのコンセプトを表したものです。

この場所は三つの大賞を受賞しました。韓国公共デザイン大賞、建築大賞、そして「韓国人が必ず行くべき場所」に登録されました。ちなみにこの建築のコンセプトを決めたのは、Shigeru Ban（坂茂）という日本の建築家です。隈研吾、安藤忠雄、坂茂の 3 人は私とたくさんのコラボレーションの仕事をしてきました。それでこのコンセプトを決める上でもいろいろ協力してくれました。だからここは彼らのような、日本から生まれて全世界的に有名になった建築家の様々なサポートを受けた場所なんです。

現在、10 か所の美術館、15 か所のレジダンスホテル、アジアでもっとも大きいレストラン、カフェ、映画館、博物館、坑道を活かした地下美術館を作っています。お金の面で言うと、この経済的価値は約 1000 億ウォンに至ると考えられます。私たちがここに入ってきた当初は 200 億ウォン程度でしたが、それが今は 1000 億ウォンまで増えました。

そうやってこの活用案が始まったわけです。経済的な面をさらに言うと、この運営費は 1 年間に約 15 億ウォンかかります。でも私たちは外部から支援を受けているわけではなく、自らの稼ぎで運営費を賄っています。ここはオープンから 2 年が経っていますが、入場料で 15 億ウォンは稼いでいます。赤字からは脱しました。ここには私たちの公金だけで 60 億ウォンぐらいがかかって、総額としては 400 億ウォンの投資がなされています。政府からの支援を除いて、私たちのお金だけです。

ここで長期的に追求している価値というのは、イギリスのテート・モダンのような美術館を作ることです。それが一つ目で、二つ目は約 200 人の芸術家たちとコラボレーションをしてアートファクトリーを運営することです。現在、ここで家具が作られてそれが販売されたり、ファッションデザイナーが生まれて洋服が作られたりしています。この敷地は 35 万 m<sup>2</sup>あります。何かご質問はありますか。

——入場料で 1 億ウォン集めてるということなんですけれども、少し不便な場所なのに、お客さんはどこからどのような人たちがやってくるのでしょうか。

美術好き、美術館に訪れるような人々は必ずここに来ます。その人たちは美術に関心がある以上に、未来の産業というやっぱり文化芸術じゃないですか。だから美術館が好きな人はわざわざここに訪れてきます。いくら交通が不便でもです。なぜなら、私たちはデザインを重視するからです。たとえばこの CI とかは、イギリスと韓国が一緒になって作ったものです。このデザイン一つ、シンボル一つを作り上げるために 4 億ウォンぐらいのお金を投資したりして、そういったデザインを見にたくさんの人々が訪れて来ます。デザインがこの核心で、私たちはたくさん投資をして来しました。私たちはこういう 3D のシミュレーションを何年もやって来ていて、アートファクトリーとして発展してきています。その他に、ナイトクラブを作って若い子たちがビールを飲んで踊れる空間にしたり。言ってみれば私たちはここに命を吹きかけるような活動をしているのです。

——芸術家 200 人とアートファクトリーを作ってるってことですけども、これは国内・海外の比率はどのぐらいですか。どのぐらい海外の芸術家がいるんですか。

国外が 4 割、国内が 6 割です。

——テート・モダンを目指してるっていうお話だったので、国際的な芸術家を集めるハブになることが 1 つの目標だと思うんですけど、国際化戦略はどう考えてらっしゃいますか。

テート・モダンの館長がここを訪れたことがあります。彼は火力発電所を世界的な美術館にしたのですが、実は彼もコレクターなんです。この先、20 年から 30 年という時間が経った後に、世界的な芸術家が現れるか否かは、芸術家たちがここに来て成長できるようなコンテンツを私たちが作り上げられるかどうか勝負がかかっています。まだ 2 年しか経ってないので、それをこれから追求していこうと思っています。

——学芸員=キュレーターは何人ぐらいここにはいるんですか。

キュレーターは一人います。私たちは「官」ではなく「民」として、経済論理から物事を考えています。民間は収益率から考えないといけません。たくさん投資をしましたので、あまりにも収益が悪いとそれは困ります。なので、私たちは美術館というよりはアートセンターに近いです。だからキュレーターも一人だけです。職員は約 20 人います。

——通常の展示のほかに特別展示とか企画展示のようなことはやってるのでしょうか。

ここでは 10 カ所の美術において年に 4 回、展示内容を変えています。だから 1 年に 40 回変えることになりますね。その秘訣は、ここにいる 200 人の芸術家はここでの活動を名誉と考えています。たとえば、今はアメリカの作家が自費負担で良いのでここで展示をしたいと圧力をかけてくるようになっています。なぜならば、ここは廃墟から創造する空間なので、その空間性が大きいですね。もう一つは、これはメンタル・ビジネスです。ここではこれまで 380 人の鉱夫が亡くなりました。その亡くなった 380 人の鉱夫は、私たちをここまで成長させた産業戦士です。彼らの存在があったから、韓国はここまで発展できました。そして彼らの犠牲があったから、芸術家たちは彼らの犠牲をモチーフにしていい作品を作れます。

今回はあなた方がここにいらしたので、私たちは炭鉱などの施設をお見せしました。もし今度、日本に帰って私たちと姉妹協定を結べるような場所がありましたら、そこに私たちの作家を派遣することも可能です。これはお金の問題ではなく、文化交流をしましょうという話です。こういう提案をしたいです。私にはただというものはあり得ませんから（笑い）。

これはチョコレートのケースに昔の鉱夫の写真を入れたものです。ここにはこれが数万個あります。こういうものが10万点あります。なので、交換展示なども可能です。町と町が協力して互いの町を観光したりする交換プログラムを、私たちがここで出会った意味として作り出すもの可能でしょう。誰かに会ったら国際的な何かを成し遂げないといけないというのが私たちの仕事なもので。

——既に福岡県立美術館がソウルの美術館と交換展示をやっています。炭鉱町出身の川俣正という芸術家が古汗（Gohan）の炭鉱住宅と田川の炭鉱住宅を交換して展示するというプロジェクトをやっています。

地域公共プロジェクトができるといいですね。地域住民、地域の作家レベルの交流を官ではなく民のレベルでやりましょう、という。そういう望みを持っています。

## ■訪問後の感想

江原道の片田舎で「Tate Modern が目標」と言い切るルール地方モデルが実践されていることには軽い衝撃を受けた。ただ、炭鉱自体はコレクションを引き立てる脇役的存在であり、現物やドキュメントの丁寧な保存を除いて歴史への敬意はあまり感じられなかった。かつての炭鉱時代を知る元基俊さんは寂しそうだった。上記記録にはないが、学生への教育は相手にせず金持ち華族を相手にしているとキム氏は断言していた。朴先生の解説によれば、美術を売る画廊のようなモデルが採用されているということで、あちこちからアート・アーティストを招いてきて、作品を金持ちに売ることによって成立している、また国の補助金も相当投入されているとのこと。アートビジネスの収益が多い反面、入場料収益は誇張されているだろう、とのことだった。一方、そのおかげで炭鉱施設の全体像が、一定の状態で保存されているのは貴重なことではある。



三炭アートマイン内部



鉱夫弁当



## 7 7月25日午後、旧東原炭座訪問

炭鉈文化祭開催中。東原炭鉈の竪坑櫓を反対側から見る駐車場に車を止め、櫓の方向に歩いて行く。お祭りということで露店も多く出て、家族連れも多く華やいだ雰囲気だった。トロッコ列車を満載にして家族連れが出発していったが、かなり遠くまで周回するトロッコのようで姿が見えなくなった。

建物の入口で、元さんは2人の炭鉈マンに呼び止められ、懐かしそうに旧交を温めていた。これらの元炭鉈マンが我々を案内してくれることになったが、かつて使われていた施設や道具が丁寧に分別され展示されていて、好感を持った。どの設備も日本炭鉈と非常に近いので説明されている内容は、通訳されなくてもだいたい分かった。関連文書が丁寧に保存・展示されているのが印象的だったが、それらを管理するアーキビストはいないという話だった。全体を通してこの点に韓国の課題を感じた。また収益性という点では疑問もあり、長期的な継続が困難な印象も受けた。



東原炭座内部の資料室を案内する元炭鉈マン



立坑櫓とトロッコ列車

## 8 江原道訪問まとめと今後の展望

この訪問の収穫としては次のようなことがある。第一に、インフラとしては産業遺産ブームに対応するような施設が既に存在することの確認である。韓国は日本以上に中央集権化が進んでいるため、太白のような地方都市の人々は日本の20-30年前のような土建国家状況の中で、文化化する上での決め手を見つけれられず模索しているが、施設は整っているし、車さえあればそれほどアクセスしにくくもない。一方で、今回訪問した施設は日本でもソウルでも知られていない。「僻地」というイメージの払拭がまずは集客上の課題かもしれない。第二に、日韓間には、炭鉈用語をはじめとする共通性が多いことも確認でき、ソフト面・文化面での交流を進めることの意義を確認できた。江原道は戦前から農業生産性の低いとこ

ろであり、日本の一部農村地帯のように高付加価値農産物を生産することも容易ではない。地域特産物の「商品化」は困難であり、自然や歴史を「商品化」せざるを得ないだろう。このとき、韓国では経済史研究の人气がなく、歴史が整理・研究されているとはいえない。江原道の発展において石炭産業が重要な役割をはたしたことを内外に周知していく作業が、僻地イメージの払拭とともに喫緊の課題だと思われる。このように考えたとき、日韓学術交流によってなすべきことは多い。とりわけ地元アーキビストや研究者を養成しながら知的基盤を作っておくことは、朝鮮半島統一後、北側の炭鉱群を安全・効率的に運営していくという技術的・実用的な意義にもつながると思われる。

以上を踏まえて日韓比較研究として取り組むべき論点として、以下の3点が当座有望である。(1)日韓の技術的交流の経過と成果を明らかにする。これまでに通産省工業技術院やJICAが主導した韓国への技術移転プロジェクトや、民間レベルで塵肺問題に取り組む労働運動の交流などが確認されている。しかし、より多くの交流がなされてきた痕跡があり、それを学術的に裏付ける必要がある。(2)衰退マネジメントの諸政策と、それに対応して行われてきた社会運動を裏付け、比較することにより東アジアのエネルギー状況に新しい光をあてる。たとえば日本で炭労が主導した「政策転換闘争」の4年後に、韓国で「燃料政策是正闘争」が取り組まれていることは興味深い。(3)採掘時および閉山後の地理的条件の厳しさが、地域再生への取り組みに与える影響の探索。逆に、これら課題先進地域で生み出されるイノベーションには普遍的な意義があると考えられ、政策・デザインや人材・情報の交流により、事態が改善すると期待される。

そこで、アジアでもっとも日本諸炭田と共通点の多い炭田としての江原道とは今後も交流を続けていくことが確認され、具体的には2018年10月に「全国石炭産業博物館等研修交流会」を韓国江原道で開催することになった。なお、「全国石炭産業博物館等研修交流会」とは、日本国内の主要な石炭博物館（釧路・石狩・常磐・宇部・筑豊・高島・三池など）に所属する学芸員や、関係するNPO、大学・民間の研究者などが集い、研究成果を共有するとともに炭田間の相違を理解するために、毎年10月、各炭田持ち回りで開催されている会合である。

## 第二部 台灣北部炭田訪問記錄



## 1 巡検の目的と概要

今回の巡検（2016年2月28日～3月2日）は、産炭地研究会（JAFCOF）の生活文化研究班の活動の一環として、近代石炭産業の歴史・記憶・遺物が現代台湾社会においていかなる意味を持っているか、日本との比較研究の手がかりを得ることが目的であった。

訪問先はいずれも台湾島北部にあり、台北市と新北市に位置している。1日目・4日目は台北市で、ここでは和興炭坑のような小規模な炭坑も見学したが、基本的には二二八和平紀念館、二二八国家紀念館、台湾博物館など、研究調査の背景となる台湾の歴史を学ぶための施設を中心にまわった。新北市は瑞芳・水金九地区（九份、金瓜石）と平溪線沿線（菁桐、十分、猴硐）に分けられ、前者は2日目、後者は3日目にまわった。前者は金鉱山、後者は石炭鉱山で有名な場所である。

参加者および行程は下記の通りである。なお、今回の参加メンバーでは、産炭地研究会の木村・森久・西牟田の3名は中国語が話せないため、西牟田の紹介で関西学院大学先端社会研究所専任研究員の村島健司氏に通訳兼現地コーディネーターをお願いした。村島氏は主に宗教・文化の視点から台湾社会について研究しており、ご家族が台湾在住のため、石炭産業や産炭地の専門家ではないが、実質的には現地受け入れ研究者のように台湾社会の政治・歴史的背景についても適宜レクチャーをしてくださった。旅程のコーディネーター、現地インフォーマントとのアポイントメントについても、村島氏にはこちらのオーダーに適切に応えた迅速な準備をしていただいた。あらためてこの場を借りてお礼申上げたい。

### 【参加者】

木村至聖（甲南女子大学人間科学部）

森久聡（京都女子大学現代社会学部）

西牟田真希（関西学院大学非常勤講師）

村島健司（関西学院大学先端社会研究所専任研究員 ※現地コーディネーター、通訳）

### 【行程】

#### 【1日目】2月28日（日）

1055 関西国際空港発 CX565（木村、森久、西牟田）。

1510 桃園国際空港着。村島氏と合流し、リムジンバスにて台北市内へ移動。

1550 台泥大樓（馬偕醫院）で下車。

1600 宿泊先のホテルサンルート台北（台北燦路都大飯店）チェックイン。

1610 地下鉄（台北捷運（MRT））民権西路駅—台大醫院駅

1640 二二八和平公園着。公園内散策の後、国立台湾博物館を見学。

1800 タクシーで信義区の和興炭坑へ移動。



- 1830 和興炭坑の施設見学。  
1900 タクシーで台北市内に移動。  
1940 夕食をとりつつ村島氏と滞在中の打ち合わせ。  
2230 宿泊先ホテルに帰着。

【2日目】2月29日（月）

- 0850 ホテル発。  
0900 地下鉄（台北捷運（MRT））民權西路駅—台北駅。台北駅から鉄道で瑞芳駅へ移動。  
1020 瑞芳駅着。金瓜石行きのバスで移動。  
1050 金瓜石着。スタッフの案内で新北市立黄金博物館区を見学。  
1330 バスで九份へ移動。  
1340 九份着。徒歩で移動しながら九份老街で昼食。  
1500 館長の案内で九份金鉱博物館を見学、その後、館長にインタビュー。  
1800 九份市街地を散策しながら、宿泊地の九份縁憶民宿に移動。  
1930 再び九份市街地に移動し、夕食をとりながら翌日以降の打ち合わせ。  
2200 宿泊先ホテルに帰着。

【3日目】3月1日（火）

- 0810 チェックアウト。ホテル発。  
0820 バスで瑞芳駅に移動  
0840 瑞芳駅着。  
0910 平溪線（ローカル線）で移動。  
1005 菁桐駅着。菁桐煤鉱記念公園を見学。  
1115 平溪線で移動。  
1135 十分駅着。送迎地点まで徒歩移動し、そこから送迎車で移動。  
1200 新平溪煤礦博物館区着。施設見学、および昼食をとりつつスタッフにインタビュー。  
1600 トロッコ列車で移動（10分）。その後、徒歩で移動。  
1640 平溪線で移動。  
1700 猴硐駅着。徒歩で移動。  
1720 猴硐礦工紀念館着。施設見学の後、煤礦博物館区を散策  
2000 平溪線で移動。瑞芳駅を経由し、台北駅へ。  
2100 台北駅着。地下鉄（台北捷運（MRT））台北駅—民權西路駅。徒歩で宿泊先のホテルサンルート台北（台北燦路都大飯店）に移動。  
2130 地下鉄（台北捷運（MRT））民權西路駅—台北駅—龍山寺駅。

- 2200 萬華夜市で夕食。
- 2300 地下鉄（台北捷運（MRT））龍山寺駅—國父紀念館駅。
- 2330 誠品書店信義店で資料収集。
- 2430 地下鉄（台北捷運（MRT））台北 101／世貿駅—民權西路駅
- 2500 ホテル帰着。

#### 【4日目】3月2日（水）

- 1030 チェックアウト。ホテル発。
- 1050 地下鉄（台北捷運（MRT））民權西路駅—台大醫院駅
- 1100 二二八和平公園着。二二八和平紀年館を見学。
- 1130 中華民国総統府等を横に見ながら、徒歩で移動。
- 1200 二二八国家紀念館着。見学。
- 1230 徒歩で移動。
- 1250 地下鉄（台北捷運（MRT））中正紀念堂駅—民權西路駅
- 1300 徒歩でホテルに戻り、荷物をピックアップ。
- 1330 村島氏と別れ、台泥大樓（馬偕醫院）よりバスで空港に移動。
- 1415 桃園国際空港着。昼食および帰国手続き。
- 1555 桃園国際空港発 CX564（木村、森久、西牟田）
- 1940 関西国際空港着。解散。

## 2 巡検の背景的関心——日台比較研究にむけて

### 2.1 日本側の文脈

日本においては 1955 年の石炭鉱業合理化臨時措置法の施行以降、石炭産業は段階的に（しかし地域レベルでは急速に）縮小されてきた。その過程で、かつての産炭地には有形無形の石炭産業の痕跡が残されることになった。今日、その多くは産業転換や再開発によって失われてしまったが、合理化の結果として遅い時期まで稼働し続けた大手炭鉱のものを中心に形をとどめたものも一部存在する。しかし稼働を止めた産業施設を残し続けるためのスキームについては手探りの状態が長く続き、一時は 1970 年代後半の夕張市による「石炭の歴史村」のようなテーマパーク型観光資源としての活用がもてはやされたこともあった。

こうした状況を大きく転換させたのが 1990 年代以降の「産業遺産」概念の普及である。1990 年に文化庁が「近代化遺産総合調査」を開始し、1996 年には文化財保護法の改正により、従来の文化財「指定」制度を補完するための「登録」制度が設けられ、明治以降の近代建築物を届出に基づいて登録することができるようになった。2007 年、2008 年には経済産業省が全国の「近代化産業遺産群」リストを発表している。国際的な情勢とし

ては、1994 年の第 18 回世界遺産委員会で採択されたいわゆる「グローバル・ストラテジー」において、産業遺産が重点項目とされたことも、世界遺産ブームの続く日本においては産業遺産の再評価を後押しした。

こうしたなかで、日本国内においては、先行する西欧の産業遺産の保存・活用事例を参照しながら、世界遺産登録運動、地域観光資源としての活用、現代アートとのコラボレーションなど、様々な取り組みが行なわれるようになった。結果として、2014 年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」、2015 年には「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録されている。しかしその一方で、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一部で戦時中に朝鮮半島出身者の強制労働が行なわれていたことに触れていないとして、韓国政府が当初登録に反対したことに表れているように、産業遺産の保存・活用だけでなく、いかに表象するか（意味づけ、物語化し、伝えるか）ということも非常に重要な問題となってきた。

こうした日本の事例を西欧の事例と比較してみたとき、確かに商品化による歴史の矮小化、地元住民の疎外など、様々に共通する要素を見つけることができるが、大きく異なるのが、国家という枠組みによる産業（遺産）の意味づけである。西欧においては、ヨーロッパ産業遺産の道（European Route of Industrial Heritage, ERIH）の取り組みにみられるように、国家を超えた技術・文化の連関が注目されている。一方日本においては、「明治日本の産業革命」というタイトルにみられるように、“明治”国家の近代化に国民や企業、地域社会がいかに貢献したかという視点から産業遺産は意味づけられているのである。世界遺産登録に際して隣国韓国が反発したことに対して、国内では「文化に政治を持ち込むな」という論調が多くみられたが、実際には産業遺産を意味づける文化的枠組み自体がそもそも政治的なものであったからこそ、そうした軋轢が起こったことは言うまでもない。

もっとも、近代日本の工業化が中央集権的な国家のもとでこそきわめて急速に実現されたということは間違いないだろう。だがそれを言うならば、明治時代に早くも日本帝国主義に呑み込まれ、日本領となっていた台湾の産業遺産との関係がもっと言及されてしかるべきであろう。つまり言うなれば、台湾の産業遺産も視野に入れることによって、現状の国家枠組みによる産業遺産理解を相対化することができるはずである。

## 2.2 台湾側の文脈

台湾（中華民国）は、ユネスコ非加盟国であるため世界遺産の推薦・登録ができない（とはいえ、「国連非加盟国」でもパレスチナのようにユネスコに加盟（2011 年）し、世界遺産登録（2012 年『イエス生誕の地 ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路』ほか 1 件）している例はある）。だがこうした状況においても、文化財保護を所轄する行政院文化建設委員会は、2002 年から「台湾世界遺産潜力点」（世界遺産の候補地）の認定を開始しており、2015 年現在で 18 件が認定されている。なかには、水金九工業遺跡（金瓜石・九份を含む）などの産業遺産も選出されているが、その背景として、2006 年に文化資産保存法

(1984 年公布) の改正によって、文化財として「橋梁と産業施設」、文化景観として「産業景観、交通施設、水利施設」の登録制度が設立されている。

このように産業遺産の文化遺産化の枠組みが整備された背景には、日本も含む国際社会における産業遺産への注目もさることながら、2000 年代に国営企業の民営化方針が決議されたことも大きい。2003 年には、破壊が危惧される近代化産業文化資産の調査が始まり、2012 年 11 月には TICCIH (国際産業遺産保存委員会) 本会議が台湾で開催されている。このとき、「台北アジア工業遺産宣言」が発表され、「欧米と異なるアジア産業遺産の特徴を提示し、遺産が危機に陥らないための国際協力の重要性が強調された」(王 2014: 60)。ほかにも、台北市の都市再生計画によって、古い建屋や倉庫工場・駅がアートや学習、NGO 活動の場として拠点化されるなど、いわゆる文化遺産の枠組み以外にも、観光、アート、生涯学習など様々なアプローチでの保存・活用の試みが進められている。

今回の巡検では、まずはこうした台湾における産業遺産の保存・活用の実態を日本のそれと比較することが中心となるが、日本統治時代、国民党独裁時代、民主化後の台湾ナショナリズムの興隆する現在まで、複数の「国家」の間で揺れ動く台湾において、何が産業遺産の表象を規定するのかを探究することも一つの課題であった。

### 3 訪問先のレポート

#### 3.1 台湾博物館・二二八事件関連施設

順番は前後するが、鉱山エリアの見学レポートを記述する前に、1 日目、4 日目に見学した、台湾社会の歴史的背景に関する施設について触れておきたい。1 日目に台湾博物館と二二八和平公園、4 日目には同公園内にある二二八紀念館、そこから少し移動したところにある二二八国家記念館を見学した。

国立台湾博物館(図 1)は 1915 年に「児玉総督および後藤民政長官記念博物館」として建設されたもので、権威主義的なクラシックな様式の建築物であった。常設展示の内容は、台湾原住民の自然と歴史、生物の多様性をテーマとしており、とくに台湾のエスニシティの多様性に配慮した展示という印象を受けた。この常設展示は 2002 年に大幅な更新をしたということだったので、ちょうど民主化後の台湾ナショナリズムの高揚時期に対応している。日本統治時代の遺産という器の中で、多様なエスニシティの集合として台湾ナショナリズムが表現されていることが非常に興味深かった。



図1 国立台湾博物館



図2 二二八和平公園のモニュメント

この博物館の位置する二二八和平公園はその名の通り、1947年の二二八事件を記念した場所である。映画『悲情城市』（1989年公開、侯孝賢監督）で描かれたことでも有名になったこの事件は、本省人（1945年の「台湾光復」以前より台湾に住んでいた人々とその子孫）によるデモを国民党政府軍が暴力によって鎮圧した事件で、このとき発令された戒厳令は1987年まで継続した。そして1908年に開園した当初は「台北新公園」だった公園が、後に民進党から台湾総統に当選する陳水扁（当時・台北市長）によって「二二八和平公園」という現在の名称に改められたのが1996年（台湾初の総統選挙が行なわれた年）ということなので、民主化のシンボルであると同時に、本省人と外省人の和解と統一、すなわち新しい台湾ナショナリズムの原点にもなっているのではないだろうか。折しも訪問初日が二二八事件当日の2月28日にあたり、我々が到着した昼過ぎには大方終わった後だったが、公園ではモニュメントのまわりでデモや追悼行事などのイベントが行なわれていたようで、「台湾独立」の幟が立つなど異様な熱気が残っていた（図2）。

二二八紀念館（図3）は公園の名称が変わった1996年、二二八事件の主要な舞台となった園内の旧台湾放送協会本部（蜂起した台湾住民がここを占拠した）の建物を紀念館としたものである。展示の主な説明については日本語、英語も併記されていたので、かなり理解の助けになった。見学順路の後半は事件の犠牲者に関するもので、犠牲者の名前や写真がモニュメントとともに掲示された様子（図4）は、日本でいうと靖国神社の遊就館を思わせるような博物館と追悼施設のミックスであった。ただし、この紀念館の場合、展示の最後には世界各地の人権・平和博物館（日本代表は大阪国際平和センター（通称・ピースおおさか）や広島平和記念資料館であった）の紹介がされており、人権・平和啓蒙施設として位置づけられていることが新鮮であった。このように「犠牲」を安易に国家に結びつけずに、人権や平和というユニバーサルな回路を経由するという方法は、台湾のナショナリズムの困難を示すものとも考えられる一方で、逆に偏狭なナショナリズムに対する代替案を提示するものと捉えることができるかもしれない。



図3 二二八紀念館・外観

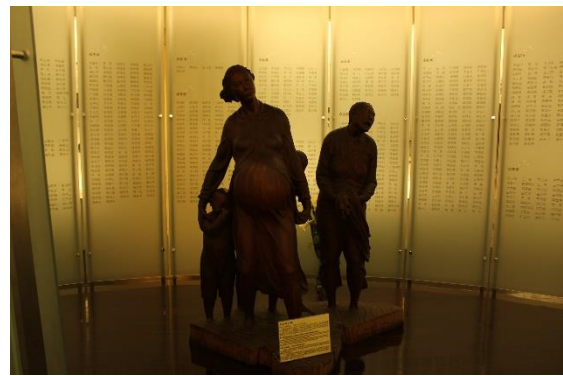


図4 二二八紀念館・犠牲者の名簿とモニュメント

一方で、公園から30分ほど徒歩で移動したところにある二二八「国家」記念館（図5・図6）は、行政院によって2011年に開設されたものである。建物は台湾教育会館として日本統治時代の1931年に建設され、戦後はアメリカの新聞社に使用され、アメリカと断交後はアメリカ文化センターとして使用されていた。展示の大枠は和平公園の方の記念館と同じであったが、何が相違点であるのか正確に表現することはできないものの、明らかに展示の基調が異なることは感じ取れた。あえていえば、先の記念館の方が民間の犠牲者、あるいは本省人の立場からの事件の展示であるのに対して、こちらの国家記念館の方は国民党政府の側からの事件の展示であるということなのかもしれない。

いずれにせよこの二つの展示の違いから、台湾ナショナリズムの方向性をめぐる内的な葛藤があることが読み取れた。こうしたナショナリズムをめぐる困難は、これからみる産業遺産の意味づけとも密接に関わっているように思われる。



図5 二二八国家記念館・外観



図6 二二八国家記念館・犠牲者の遺影

### 3.2 和興炭坑

1日目のスケジュール的に多少余裕があったため、台北市内で2014年に一般公開されたばかりの炭坑があるということで情報収集し、住所をたよりにタクシーで探してもらって



訪問した。日本統治時代の 1936 年に採炭開始し、1965 年に閉山したこの和興炭坑（台北市信義区）は Google マップにも載っているものの、山道を登った場所にあるため、かなり見つけるのに難儀した。実際に着いてみると、坑口のほんの入り口だけがあって（図 7）、その中のわずかなスペースに写真つきのパネルで説明がされているだけであった（図 8）。日本人はもちろん、台湾人であってもここにわざわざ見学を訪れる人がいるのか疑問だったが、それよりも入口に宗教団体の事務所のようなものがあり、炭坑の施設もこの団体が管理しているようだった。施設の案内板などには、「台北市政府工務局台地工程處」のロゴがあったので、管理にあたることで補助金が出ているのかもしれない。

なお、後で調べた情報だが、信義区には他にも徳興炭坑（1897 年採炭開始、閉山年不明）という炭坑があり、見学できるように整備されているようだったが、今回は訪問することができなかった。



図 7 和興炭坑坑口（写真の右側）



図 8 和興炭坑内の展示

### 3.3 瑞芳・水金九地区（九份、金瓜石）

2 日目は台北市から新北市に移動し、瑞芳・水金九地区（そのうち九份、金瓜石の 2 エリア）をまわった。前半が金瓜石で、後半が九份でいずれも金採掘で有名な観光地である。大きな荷物とは 1 日目に宿泊した台北のホテルに残して移動し、この日だけ九份で別に宿をとって宿泊した。

この地区では、清の時代に金鉱脈・露頭が発見されるも、すぐに日本統治下に入り、1896（明治 29）年、台湾総督府による台湾鉱業規則の実施を経て、本格的な金採掘が始まった。基隆山の西側が瑞芳（九份）鉱山、東側が金瓜石鉱山であり（図 9）、前者は藤田組、後者は田中組に採掘権が認められた。これらの鉱山は、1900 年代～1910 年代前半、1930 年代には（それぞれが）佐渡金山を超える金産出量を誇り、「東洋一」の金山であった。特徴としては、後者の金瓜石鉱山の方が機械化された大規模経営で、日本人・台湾人の人口がほぼ同数だったのに対し、前者の瑞芳（九份）鉱山は鉱脈が小規模だったため請負制をとり、日本人は極めて少なく、多くの台湾人が住んでいたことである。



図9 九份および金瓜石の位置図

### 3.3.1 金瓜石黄金博物園區

まず、午前中にまわった金瓜石鉱山（新北市瑞芳区）について記述する。先に触れた通り、この鉱山は1896年に田中長兵衛（金石鉱山田中製鉄所（現・新日鉄金石製鉄所）の創設者）の田中組が採掘権を認められ、1925年に総督府評議員もしていた後宮信太郎の金瓜石鉱山（株）に買収され機械化が進んだ。1933年には日本鉱業が買収して台湾鉱業（株）が成立し、経営は大規模化していく。戦後は、中華民国政府に接收され、1955年には台湾金属鉱業股份有限公司に改組されているが、この間も日本鉱業の技術支援は続いていたという。しかし、1987年に銅価格の下落による経営不振の結果、操業停止となり、台湾電力公司与台湾糖業公司の管理下に置かれる。その後、新北市が企業の協力を得て、2004年11月に黄金博物園區を開園している。



図10 鉱長の三毛菊次郎宅



図11 黄金館周辺の観光客





図 12 本山五坑・坑内の展示



図 13 金瓜石神社跡

博物館区内では、入口のインフォメーションセンターで入場料を払い、ガイドの説明に従って見学をした（中国語を村島氏が通訳、日本語のガイドもいるそうだが）。はじめに、1930年代に建設された日本式の高級職員宅や、鉱長の三毛菊次郎宅（図10）、太子賓館（皇太子が滞在することを想定して作られたそうだが、結局使われなかった）の説明を受けた。ただし、前年の台風のせいで壊れて修理中とのことで、職員宅も太子賓館も外から眺めるだけ、鉱長宅も上から見るだけであり、屋根にはビニールシートがかけられ、窓や戸板が外れ、かなりボロボロになっている有様だった。山を徒歩で登る途中、鉱員社宅の跡などもあったが、こちらはそもそも見学用に整備されておらず、日本とは違う南国の植生に呑み込まれた廃墟となっていた。他に事務所の建物や交番はきれいに整備され、展示施設などにされていたが、基本的には観光客向けに立派そうな建物だけを取りあえず整備して案内しているという印象を受けた。坑口近くの展示施設である「黄金館」の周辺は多くの観光客でにぎわっていた（図11）。展示内容は坑内で使う道具や作業の様子の模型など、日本の鉱山博物館（佐渡など）と同じような構成で、それなりに立派なものだった。目玉はやはり坑道体験のようだった。こちらもマネキンなどで作業の様子を再現しているが（図12）、体系的に作業の流れを示すというよりは雰囲気だけで、観光施設という性格が強かった。その後、ほぼ登山とっていい段数の階段を上り、山神社（図13）まで行った。本殿はすでに跡形もないが、台湾の気候では木造の構造物は腐ってしまうためか、石造の鳥居や柱だけが残っていて、鉱山集落を見下ろす景観は独特のものであった。

### 3.3.2 九份金鉱博物館

午後はバスで九份に移動した。瑞芳（九份）鉱山は長州出身の政商・藤田伝三郎の藤田組が鉱業権を取得しており、伝三郎自身が小坂鉱山（現・DOWAホールディングス）を経営したこと、伝三郎の甥の久原房之助が日立製作所（株）や日本鉱業（株）を設立したことなどから、日本企業との関わりも強い。1920年には、操業を請け負っていた雲泉商会（台湾五大財閥の一つの経営者・顔雲年の会社）から分離した台陽鉱業に鉱業権が引き渡されている（1948年に台陽鉱業股份有限公司に改組）。閉山は金瓜石より早い1971年である。

徒歩移動で老街を歩いて昼食も摂ったが、こちらは金瓜石以上に観光客が多く、狭い街道の両側に店があり、人でごった返していた。街中を抜けて少し山を下った外れに、入場無料の九份金鉱博物館（図 14）があり、こちらでは館長の曾建文氏に展示の説明を受け、簡単なインタビューをすることができた。博物館自体は、金をはじめとする鉱物の展示（図 15）をメインとし、入口に坑口の入り口の模型と、2 階にかつての九份の写真の展示と、砂金採り体験コーナーで構成されている。鉱山の技術や生活の様子についての展示はほとんどなかった。入口の坑口模型のコーナーで曾氏に坑内で使うランプに火をつけてもらったり（図 16）、2 階の砂金採りコーナーで実際に砂金を取り出すプロセスを見せてもらったりした後（図 17）、1 時間ほどインタビューを行なった（中国語を村島氏が通訳）。

この博物館は三代にわたって金鉱山で働いてきた曾水池氏が 1993 年に設立したもので、現在の館長の建文氏はその子で 5 年くらいまえに代替わりしたとのことである。もともとは県政府と合同で博物館を作る予定だったそうだが手を引かれてしまい、水池氏は金鉱山の歴史を伝えるために退職金で博物館を私設したという。建文氏はトラックの運転手をしながらときどき手伝うくらいの関わりだったが、父がテレビでとりあげられたことがきっかけに関心を持つようになった。1 日で 20～30 人程度の人が訪れるということだったが、金瓜石の黄金博物館と間違えて来る人が多いという話が面白かった。実際、インターネットでこちらの金鉱博物館で調べると、JTB などのサイトでも、金瓜石の博物館を曾氏の父親が設立したことになっているなど、かなり混同されているようだ（ちなみにその後、九份老街のなかにもまた別に無料の「黄金博物館」があり、こちらは 2004 年に開設されたもののようで、やはり鉱物中心の展示というかコレクションであった）。

曾氏自身は鉱山で働いていたわけではないため、あまり突っ込んだ話はできなかった。やはり実際に働いていた曾水池氏の体験に基づく説明を伴ってこそこの博物館であるように感じた。また、先の金瓜石の博物館の大規模な観光テーマパーク（ただしメンテナンスは中途半端）と、観光地に立地しているが私設で細々と運営されている九份の資料館の落差は、大規模経営されていた金瓜石鉱山と小規模・請負制の瑞芳（九份）鉱山の相違がそのまま現代の観光投資のあり方にも引き継がれているようだった。ただし、同じ「観光地」でも活気があると感じられたのは九份の方だった。これは現在に続く台湾人コミュニティの存在によるところが大きいのかもしれない。



図 14 九份金鉱博物館・外観



図 15 博物館内の鉱石の展示



図 16 坑口模型の前で説明する曾氏



図 17 砂金採りの工程の説明

### 3.4 平溪線沿線（菁桐、十份、猴硐）

3 日目は朝早めの時間に九份の宿を出発し、瑞芳駅よりローカル線の平溪線（図 18）に乗って、いよいよ石炭産業の遺構を産業遺産として保存する施設をまわることになった。平溪線は 1922 年（大正 11 年）、日本統治時代に菁桐坑の開発のため台陽鉱業が敷設し、炭坑専用の石底線として開業したものである。1929 年（昭和 4 年）にこれを台湾総督府が買収し、平溪線となった。沿線には主に 3 箇所の炭鉱とそれに対応する保存・展示施設があり、それらを順番にまわった。



図 18 平溪線沿線の案内図

### 3.4.1 菁桐煤礦紀念公園

最初に訪れたのは平溪線の終点にある菁桐駅（新北市平溪区）で、台北炭鉱（株）（後の台陽鉱業（株））が1918年に開発した石底炭鉱があった。1931年に電力が導入され、1939年に石底大斜坑完成するなど、台湾最大の産出量を誇る炭鉱であった。1975年に石底大斜坑は閉坑し、1987年には台陽石底炭鉱自体も閉山となった。その後、1992年に平溪線が観光鉄道に指定され、2001年、日本式の駅舎である菁桐駅、台陽鉱業会社の招待所、選炭工場などが歴史的建築物100景に入選している。2002年には老街が再建され、2003年、菁桐礦業生活館が開館している。

駅舎のすぐそばにホッパーがあり（図 19）、そこから少し斜面を上ったところに再建された老街（図 20）もすぐ目の前に大斜坑（図 21）や事務所、倉庫（図 22）などの建物の跡が残っており、煤礦紀念公園とされている。建物はまさに廃墟の状態であり、金瓜石と同様に南国の植生に呑み込まれた独特の景観を作っていた。それぞれの構造物には中国語・英語・日本語の簡単な説明が付されていた。廃墟の状態ではあるが、坑口からホッパーまでの導線が公園内に一通り揃っているという意味では、見ごたえのある場所であった。説明書きには、「あなたは今台湾の運命を変えた土地の上に立っています！」と書かれていた。なお、礦業生活館では見学を予定していて、当日訪問することも村島氏を通じて伝えていたはずなのだが、なぜか施設には鍵がかかっていて中に入ることはできず、ガラス窓越しに中の様子を眺めるだけにとどまった。





図 19 駅前のホッパー



図 20 再建された老街



図 21 石底大斜坑の坑口跡



図 22 資材倉庫跡

### 3.4.2 新平溪煤鉍博物園區

平溪線を少し戻って、次に訪れたのは、十份駅（新北市平溪区）である。線路の間近に商店が並んでおり、観光客は線路の上を歩きながら、ときどき列車が来ると道をあけるといったような風情のある景観であった。ここでは天燈（ランタン）を空に飛ばす行事が旧正月にあり、それ以外の時期でも観光客が天燈を飛ばすことができる。ローカル線にもかかわらず、多くの観光客がこの十份駅で乗降車しており、主に台北方面からの日帰り観光地として人気があることがうかがえた（図 23）。

さてこの十份駅の最寄りにあった炭鉍が新平溪炭鉍である。といっても歴史は新しく、先の石底炭鉍と同じ台陽鉍業が 1965 年に開坑し、1967 年に採掘を開始している（後述のインタビューによれば、戦前の 1938 年に日本政府が台陽鉍業に委託して開発するも、太平洋戦争開戦で中止となった経緯があるようだ）。これを 1985 年に龔詠滄氏が買収し、1997 年の閉山後も、龔氏が私費を投じて 2002 年に台湾煤鉍博物館としている。2012 年に新平溪煤鉍博物園區に改称し、歐基理国際発展公司に経営が移行した現在は、「台湾礦業文化休閒生態村」として運営されているようだ。

今回インタビューしたのは、この施設のマネージャーにあたる、欧基理国際発展公司（Organie International Development Co., Ltd）総経理の黄祥富（Chinlun Huang）氏である（図 24）。黄氏はアメリカの大学に留学後、仕事の関係で中国に行っていたが、2013 年

に台湾に戻ってきたときに以前のオーナー（おそらく龔氏の息子さん）から経営を受け継いだ。そのときは行政などからの援助は全くなく、「廃墟みたいな状態」だったと黄氏は言う。彼は農業が専門で、エコロジーが流行っているから、この施設もそういったテーマのものに転換しようと考えているという。他にも隣接する土地を取得して、アーティストによる彫刻なども集めた彫刻公園も作りたいと思っている。台湾大学の先輩が農林省に勤めていて、政府の補助金ももらえるかもしれないということだった。ちょうど我々が訪問したときも、經濟部礦務局礦場保安組の沈振勝氏（名刺有り）が視察に来ていて、黄氏も忙しそうにしていたのでインタビューも 30 分程度で切り上げた。



図 23 十份駅周辺の様子



図 24 インタビュー風景



図 25 繰込場の展示



図 26 安全訓練坑道



図 27 礦工弁当

インタビュー後、スタッフの案内で施設を見学した。資料館にあたる文史展覽室では、主にパネルで坑内作業の様子が説明されており、坑口、繰込場の展示（図 25）を見学した後、ビデオを見せてもらった。ビデオの内容は、現地で放送されたドキュメンタリーのような内容であった。また、手作り感のある安全訓練坑道（図 26）にも実際に入ってみることができた。

炭鉱夫の弁当を再現したという「礦工弁当」（ただかなりアレンジされていて味はわりと美味しかった）（図 27）を食べてから、次のインタビューを行なった。十份駅方面から坑口まで労働者を運んでいたトロッコ列車の運転手だった呉氏（2016 年当時 68 歳の女性、下のお名前は不明）に炭鉱操業当時の様子などを聞いた。ただし彼女は台湾中部・雲林県の少数民族の出身で少し言語が違うということで、我々とは村島氏と、スタッフの女性の 2 段階の通訳を介したインタビューとなり非常に時間がかかった。呉氏は炭鉱で働いていた夫（採炭、二代目炭鉱夫）のところへ雲林から嫁いできて、免許が不要で条件がよかったのでトロッコの運転手として働くようになった。1997 年に炭鉱が閉山してからしばらく他に移っていたが、2001 年にオーナーの龔氏に呼ばれて戻ってきた。パンタグラフに触れないように運転すること、線路のつなぎ目で脱線しないようスピードを落とすこと（乗客が多いとより難しい）などトロッコ列車の運転にはコツがいるらしく、呉氏の熟練の技が見込まれたのだと思われる。炭鉱操業時の話はかなり断片的にしか聞けなかったが、当時炭鉱で働いていたのは男性 500 人くらいにたいして女性は 20 人くらいだった。週末は病院がお休みのため、炭鉱も休みで、週休 2 日だった。女性の多くは田んぼや、タケノコやサトウキビなどの農業をやっていた人が大半だった。他の大手炭鉱と比べて、のんびりした様子が伝わってきた。

帰りは呉氏の運転するトロッコ列車（第二部冒頭の写真）で十份駅の近くまで運んでもらった。ちなみに石炭は坑口からベルトコンベアで運ばれており、トロッコ列車を降りてから駅までは、このベルトコンベアやホッパーなどの施設をみて歩くことができた。

### 3.4.3 猴硐炭鉱博物園區

再び平溪線を台北方面に少し戻り、猴硐駅（新北市瑞芳区）で下車した。ここにはかつてあった基隆炭鉱は、1908 年に顔雲年（すでに何度も名前が出てきている台陽鉱業の経営者）が鉱業権を取得し、1912 年に境港出身の実業家である木村久太郎と共同で設立した久年炭鉱が元となっている。1918 年、三井鉱山と久年炭鉱が合併し、台湾最大の基隆炭鉱株式会社が設立された（1921～28 年所長の小林寛は三井田川伊田坑の元主任）。これによって、日本の技術で選炭機、長壁式採炭の導入、坑内電化など機械化や合理化が進んだようだ。1934 年には、李建興が鉱業権を請け負い、瑞三鉱業を設立し、1990 年の閉山まで続いている。閉山後、地元有志による保存活動が進み、2005 年に土地所有者の瑞三公司与契約し、周辺を「猴硐炭鉱博物園區」として整備、2010 年の一般開放に至っている。





図 28 基隆川



図 29 地質生態館・礦工紀念館・外観



図 30 礦工紀念館の展示



図 31 礦工紀念館の展示



図 32 猴硐坑をトロッコで見学



図 33 瑞三鉱業事務所ビル・内部

駅の目の前に巨大な選炭場が見え、それだけでも圧巻であった。川沿い（図 28）に歩いていくと、かつての商店街があり、そこを抜けると間もなく 1940 年開坑の瑞三本坑の坑口、および展示施設（地質生態館・礦工紀念館）（図 29）がある。この展示施設が今回台湾訪問の際に立ち寄ったもののなかでは最も体系的に整理され、プレゼンテーションも工夫・洗練されたものであると感じた。地質生態館はかつての砂乾燥室でその名の通り地質学的な説明をしており、礦工紀念館はかつての炭鉱夫の浴場で炭鉱夫の装備品（安全器具も含む）、購買部などの生活に関するもの、移民労働者、じん肺問題、女性鉱員、絵画な



どの炭鉱の芸術文化、閉山後いくつもあったゼネラルストアが閉店し、人々が移動販売に頼らざるを得なくなったことなど、きわめて目配りの利いた多角的な展示がなされていた。展示の方法も、かつての浴場の雰囲気を活かして浴室やロッカーに模したデザイン（図 30・31）にするなど、英国の博物館でも見かけると非常に洗練されたものであった。展示の説明は基本的に中国語と英語であったので、我々も説明を読むだけでおおよそ内容を理解することができた。

展示施設のすぐ隣には、戦後に建てられた煉瓦造りの社宅もあり、見学することができた。他にも、川を渡って少し移動したところには、戦後アメリカの援助によって建設された住宅や所長宿舎、診療所などの建物が残っており、道沿いには新北市政府によって設置された説明版（中国語・英語・日本語）があり炭鉱コミュニティの全体像を歩きながら理解することができた。猴硐坑の隣にある瑞三鉱業事務所ビル（図 33）は会社に関する資料の展示施設および土産物屋となっていて、生産量や労働者の統計データなどもみることができた。なお、猴硐坑の一部はトロッコ列車で見学することのできる施設（図 32）になっており、我々も実際にそれに乗ってスタッフの話を聞いたが、展示自体はデザイン的には洗練されてはいるものの雰囲気重視の遊園地的な施設であり、スタッフも炭鉱のことについては用意された説明以上のことはよく知らないようだった。

ところでこの猴硐は猫が多い「猫村」として有名なようで、駅をはじめ各所に猫のイラストの描かれた看板が立っており、猫カフェや猫グッズの店もたくさんあるようだった。そのためか観光客も意外に多く、駅から少し離れた先の展示施設には観光客はいなかったが、トロッコ列車で入れる猴硐坑は駅から比較的近いこともあって観光客が他にもちらほらみられた。これらの観光客は炭鉱に興味があるというよりは、猫村目的でやってきて、ついでにこうした炭鉱の歴史の一端にも触れているようであった。

#### 4 巡検の総括

以上、2 日目の金鉱山関連施設、3 日目の炭鉱関連施設を中心に巡検のレビューを行ってきた。今回はもともとの伝手もとくになく、言葉の壁もあってインタビューはなかなか思うようにいかない部分が多かったが、村島氏の助力もあって短い期間に効率的に多くの施設をまわることができた。実際に行ってみると、台北からも日帰りが可能な圏内でアクセスも容易で、展示や案内板も中国語だけでなく英語、場合によっては日本語が併記されていて非常に見学しやすいところが多く、その点では日本以上であった。

今回まわった金鉱山・石炭鉱山の跡地は 1970 年代閉山の九份を除いて、多くが 1980～90 年代に閉山しており、それからさほど時間をあけずに 2000 年代（民進党政権時）に産業遺産調査や活用の試みが始まっているため、保存状態はともかく施設などのモノは比較的よく残っているという印象を受けた（一方、資料や証言者などの所在については今回踏み込んで調査することができなかった）。保存・活用の仕方としては、かつての日本の夕

張や筑豊のように、とりあえず公園化してモニュメントを立てて、遺物は博物館（ハコモノ）へという流れではなく、同じ公園化にしてもあるものはなるべくそのまま野外で残すエコミュージアムの枠組みをとり、その場で歩いて見学してまわれるような仕組み（複数言語による案内板、マップ、アプリなど）を作っているという特徴がみられた。

表1 今回巡検した施設の基本情報のまとめ

		企業	閉山	その後
金 鉱	金瓜 石	日本鉱業系→公営企業	1987 年	2004 年に行政+企業でテーマパーク化
	九份	地元企業（台陽鉱業）	1971 年	映画の知名度による観光化
石 炭	菁桐	地元企業（台陽鉱業）	1987 年	2000 年代に行政が保存・公園化
	十份	地元企業（台陽鉱業）→個人企業	1997 年	2002 年に個人により博物館開館、翌年行政による承認
	猴硐	地元（台陽鉱業）と日本企業（三井）の合併→地元企業（瑞三鉱業）	1990 年	2005 年にエコミュージアム化

表象については、技術の発展を時系列的に示すフォーマットが一般的な日本の産業遺産展示に対して、たとえば移民労働者、じん肺問題、女性鉱員など多角的な視点を示すとともに、閉山後の地域社会についても言及している猴硐の展示施設にはただただ感心させられた。機会があれば展示構成の経緯についてキュレーターに話を聞いてみたいものである。その一方で、全体としては観光コンテンツ化（商品化）が急速に進んでいる傾向は指摘できるだろう。とくに金瓜石のようにかつて公営企業によってまとまった投資がなされ、今日大規模にテーマパーク化されている場所については、地元住民にとっての価値や文化財的な価値よりも観光客受けする雰囲気や驚きが重視されているように見て取れた。そしてその傾向は、九份の金鉱博物館のような個人によって運営された小規模な施設においてもみられるかもしれない。実際に鉱山労働を経験した世代からそうでない世代に継承されるにしたがって、歴史を語り継ぐ意思を持った施設から、観光客向けの選択肢の一つとしてのアクティビティ（砂金採りなど）を提供する施設という性格が強まっているように感じられた。

こうした多角的な視点による表象と、急速な観光化は、いずれも台湾における強まりつつあるがしかし内的に葛藤するナショナリズムと無関係ではないだろう。日本において「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録される過程で、その表象がきわめて中央集権的な、ナショナリスティックなものに収斂していったのとは異なり、台湾の場合は前述の通り国家的アイデンティティが歴史的に揺れ動いてきたからこそ、安易に「国家の近代化」を論じることができない。そうしたジレンマが、一方では技術の発展だけでなく、エ

スニシティの多様性や人権問題、地域政策など多様な視点による表象を可能にし、また一方で明確な軸がないことで安易な観光化（一時的な経済効果だけで語られてしまう）も呼び込みやすいといえる。

こうしたことを踏まえた今後の検討課題としては、実際にいかなる社会層の人々が産業遺産の表象に関わり、いかなる表象を目指しているのか（目指してきたのか）という点であろう。これについてはとくに、観光化が進むと同時に、礦工記念館などで目配りの利いた多角的な展示を行っていた猴硐の事例が適切な対象となりそうである。

## 参考文献

- 福本寛, 2009, 「台湾の炭鉱跡を訪ねて——台湾・釧路・田川の炭鉱をめぐる人々」『田川市石炭・歴史博物館館報』4: 25-31.
- 木村至聖, 2014, 『産業遺産の記憶と表象——「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会.
- 丸川哲史, 2010, 『台湾ナショナリズム——東アジア近代のアポリア』講談社.
- 二階堂達郎, 2012, 「台湾北部における鉱山遺産の保存と活用」『近畿の産業遺産』6: 17-22.
- 王新衡, 2014, 『植民地期の近代化産業遺産群の変容と価値保全に関する研究——台湾・旧台南州における近代製糖業関連遺産を中心に』（東京大学都市工学系博士論文）.



韓国江原道および台湾北部の炭鉱関連施設  
――巡検記録(2015-2016)――

(JAFCOF リサーチ・ペーパー vol.1)



発行日:2017 年 10 月 20 日



編集:中澤秀雄・木村至聖

発行者:産炭地研究会(JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>



本報告書は, 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)『東アジア産炭地の再定義』(課題番号・26245059 研究代表者・中澤秀雄)による研究成果の一部である。